

# 以前の哲学者たち

第2版



9784876986880



1923010057002

ISBN4-87698-688-6

C3010 ¥5700E

定価:本体5,700円(税別)

著 G・S・カーク  
J・E・レイヴン  
M・スコフィールド

訳 内山勝利  
木原志乃  
三國方栄二  
丸橋裕要

131.1

ソ

札幌市中央図書館



0117235234

以前の哲学者たち M・スコフィールド 著  
丸橋裕要 訳

# 以前の哲学者たち



0117235234

語ることでできる人はひとりもない。なぜなら、彼らの間では異常なほどの沈黙が守られていたからである。もつとも、次のようなことは、ピュタゴラスが言ったこととして一般によく知られていた。すなわち、まず第一に、魂は不死であること。次に、魂は他の生きものに生まれ変わること。さらに、生成したものはある周期に従ってまたふたたび生まれきて、絶対的な意味で新しいものはなにもないということ。そして、魂をもって生じてきたものはすべて同族的なものであると考えなければならぬということである。以上のような教説を最初にギリシアにもたらしたのはピュタゴラスであったように思われる。

資料285（たぶんデカイアアルコスを典拠としている）は、ピュタゴラスの教説に關して、われわれの典拠に関する調査から確認できるかざりのものを要約したものである。われわれが強調した1, 2の点（とくに、数やハルモニアについての思想）を省いているが、ピュタゴラス派の秘密の嚴守（アリストテレス断片192（DK14.7）やディオゲネス・ラエルティオス『哲学者列伝』VIII.15参照）や物事が円環をなしてくり返されるという思想（エウデモス断片（シンブリキオス『アリストテレス「自然学」注解』732, 30）：DK58B34を参照）などこれまで言及されなかつたものを含んでいる。この資料もまた、その他のものと同様に、ピュタゴラスの思想の内容について、はつきりと哲学的、科学的と言えらるものと確認する根拠にはほとんどなっていない。われわれが下すべき結論は、ピュタゴラスが哲学者であるというのは賢者のひとりであった（前述の280-281ページ参照）というくらいのことではしかないというものである。しかしながら、より広い意味でのギリシア思想への彼の貢献は独自で、魅力的で、持続的なものであつたと言えよう。

## I. 年代と生涯

## 286 プラトン『バルメニデス』127A（DK29A11）

アンティポンの説明によると、ピュトドロスは、バルメニデスとゼノンがかつてパンアテナイア大祭の折りにアテナイにやってきましたと語った。バルメニデスはかなりの老人——年は65歳ほど——であつて、頭髮はすっかり白くなつていたが、その外見は立派であつた。ゼノンのほうはその時40歳近くで、背丈も高く、眉目秀麗であつた。噂では彼はバルメニデスのお気に入りだつた。アンティポンの言うところでは、二人はケラメイコスの城壁の外にあるピュトドロスの家に逗留した。そしてちよつとそこにソクラテスと、他にも多くの人々が彼と一緒にやつてきた。ゼノンの著わしたものを聞きたいと思つてのことである。というのも、彼の昔物が彼らによつてアテナイへ持ち込まれたのはこの時が初めてだつたからである。そしてソクラテスは当時まだかなり若かつた。

## 287 デイオゲネス・ラエルティオス『哲学者列伝』第9巻21-23節（DK28A1）

ピュレスの子でエレアの人バルメニデスはクセノパネスの弟子であつた（彼<sup>1)</sup>については、テオプラストスが『摘要』の中で、アナクシマンドロスに師事したと述べている）。ただし彼は、クセノパネスの弟子ではあつたが、その教えを継承することはなかつた。彼は、ソテイオンが報告していたように、ピュタゴラス

1) テオプラストスが主張しているのはクセノパネスのことだつたに違いないが、デイオゲネスはあかもバルメニデスのことが言われているかのように記述している。

はそうであろう。パルメニデスを哲学へと転向させたのがピュタゴラス派の人間であつたにしても、彼がピュタゴラス派の考え方に傾倒し、それが彼の円熟した思想において存続していたことを示す形跡は、おそらく、誕生を何か「憎むべき」もの（資料306）とする記述と、魂の運命——これについてはシンプリキオスが断片13（「アリストテレス『自然学』注解」39.18）との関連で手短にかつ暗示的に書き記している——の教説を除いては、まず見当たらない。パルメニデスがクセノパネスに教えを受けたとす説はアリストテレスからテオプラストスを引き継いだものだが、当のアリストテレスはと言うと、『ソピステス』でプラトンが与えている、おそらくはそれほど大まじめなものではない所見から、それを得た可能性がある（215ページ以下の議論と合わせて資料163を見よ）。確かにパルメニデスには、クセノパネスの神論（資料170と171）および認識論（資料186-189）の、単に言葉の上だけにとどまらない反映が見られる。そしてパルメニデスに六脚韻の詩で自らの哲学を書こうと決心させたきっかけの一つに、クセノパネス——彼はその長い生涯の後半生をシケリアと南イタリアで過ごした——という先例があつたのかもしれない。

## II. パルメニデスの六脚韻<sup>\* 訳注</sup>の詩

パルメニデスには一編の書物だけが帰されている（ディオゲネス・ラエルティオス『哲学者列伝』I.16.DK28A13）。六脚韻の詩であるこの著作については、主としてセクストス・エンペイリコス（彼は序歌を引用保存した）とシンプリキオス（彼は、『この著作が希少であるがゆえ』にアリストテレスの『天体論』と『自然学』に対する自分の注解中に、さらにそれ以上の抜粋を書き写した）のおかげでかなりの量の断片が残存している。時代の古今を問わず、パルメニデスの作家としての才能を低く見る点では、人々の評価は一致している。パルメニデスの言葉づかいはいはとでも流麗とは言えず、また、革新的で難解で高度に抽象的な哲学的見解をむりやり韻律形式にはめ込もうと奮

<sup>\*</sup> 訳注\* 叙事詩の詩型で、長短短の三音節（これは長々の三音節と置換可能）を単位（脚）とし、一行は六脚からなっており、すなわち、長短短あるいは長々を五回繰り返し、最後の脚だけ長短または長々の二音節で終わる型のものである。]

派のアメイニアス——ディオカイタスの子で、貧しくはあつたが高貴な人物であつた——とも親しく交わり、彼に従うことのほうをよしとした。アメイニアスが亡くなると、名家の出で裕福だつたパルメニデスは彼のために社を建立した。パルメニデスが考究の生へと転向したのはクセノパネスによつてというよりもアメイニアスによつてであつた。……彼は第69オリュンピア祭期（前500年頃）に盛年を迎えた。……また、スベウシッポスがその著書『哲学者たちについて』で報告しているように、パルメニデスはエレアの市民たちのために法を起草したとも言われている。

かつてパルメニデスとゼノンがアテナイを訪問してそこで若きソクラテスと会つたにせよそうでなかつたにせよ、プラトンが各自の年齢に関してこれほどに厳密になる必要はどこにもなかつた。このように事細かにプラトンが述べているという事実が強く示唆しているのは、彼が年代の点で正確な記述をしているということである。ソクラテスは前399年に死刑に処せられたときちょうど70歳すぎだつた。このことから彼の生年は、前470/69年ということになる。もし  $\sigma\phi\delta\delta\alpha\ \nu\acute{\epsilon}\omicron\nu$ （「かなり若かつた」）という言葉が、ソクラテスはおよそ20歳だつたということの意味していると仮定するならば、その場合、ソクラテスとパルメニデスたちとの邂逅は前450年にあつた出来事ということにならう。そこからすると、パルメニデスの生年はおよそ前515年、ゼノンの生年は前490年頃となる。なるほど確かに、この年代と、ディオゲネスが与えている年代——彼はおそらくはアポロドロスから得たのであろう——は一致していない。しかし、バーネットが指摘しているように（EGP, 170）、「アポロドロスによつて与えられている年代は、エレアの創設年（前540年）にのみ依拠しており、この創設年を彼はクセノパネスの盛年として採用した。パルメニデスが生まれたのはこの年であり、それはちよつと、パルメニデスが「盛年を迎えた」年にゼノンが生まれたのと同様である」。プラトン後期の一対話篇は、年代決定の証拠としては十分なものではないかもしれないが、こちらの方がアポロドロスの図式よりも信頼できるとはほとんど疑いようがない。

資料287に含まれるその他の情報は、たぶん初期の伝承——それらはことによると真実かもしれない——に由来するものであり、とりわけソテイオンの伝える詳細な話

行)、シンブリキオス「アリストテレス「大體論」注解』557.25以下(28-32行)私のところが望むだけ遠くまで私を運ぶ雌馬たちは、私を連れて伸の名高き道に就かせると、私を急かせた。

この道はすべての街々<sup>2)</sup>を越えて物知る人を選び行く、その道を私は運ばれて行つた、なぜなら、その道を、知恵ある馬たち

が馬車を強く牽きながら私を運んで行つたのであり、また乙女たちがその道を案内したからである、<sup>5</sup>そしてこしきの中の車軸は灼熱の炎を放ちつつ角笛のごとき音を發した、

それというのも、車軸は二つのぐるぐると回転する車輪によって両側からきつく押しつけられていたからである、太陽の娘たちが、光を目指して夜の館を出て、そして両手で頭から覆いを押しやって、私を護り送ろうと急いだときに、<sup>10</sup>

そこには「夜」と「昼」の道の門があり、まぐさと石の敷居がそれらの門を囲い込んでいる、これらの門自体は空高くそびえ大きな扉でふさがれており、復讐の女神デイクー(正義)が開け閉めの鍵を持っている、<sup>15</sup>

彼女を乙女たちは優しいことばで暮らせて、栓で止められた門棒を門から即座に押し戻すようと巧みに説得した、

そして門が、釘と鋸でしっかりと固定された青銅装の支軸を軸受けの中で交互に回転させながら大きく開くと、扉の枠の中にぽっかりと隙間ができた、

その門を真っ直ぐに通り返けると、乙女たちは馬と馬車を大道に就かせた、

そして女神が私を優しく迎えると、私の右手をその両手にとつて私に次のような言葉で語りかけた、

2) 推測に基づく読みである「街々(ἀστυ)」についてはA. H. Coxon, *CQ N. S.* 18 (1968), 69とA. P. D. Mourelatos, *The Route of Parmenides* (New Haven, Conn., 1970), 22 n.31を見よ。

開するあまり、しばしばいかんともしがたい曖昧さ、とりわけ構文上の曖昧さを生む結果となっている。しかしその一方で、詩の中でもそれほど論証的でない箇所では、どこもない莊重さでも言うべきものを達成している。

詩は、序歌以降、二つの部分に分かれる。第一部は「まん丸い真理の揺るぎなきころ」(資料288, 29行)について詳説するものである。その議論は徹底的で強力である。バルメニデスの主張によると、どのような探究においても、論理的に見て矛盾のない可能性は二つあり、しかもその二つしかないものであり、これらは排他的関係にある。すなわち、探究の主題となるものが存在するという可能性か、存在しないという可能性のいずれかである。バルメニデスは、認識論的な理由から、後者の選択肢を考えられえないものとして除外する。そしてその上で彼がとりかかるのは、凡庸な死すべき者たちへの非難罵倒である。なぜなら、死すべき者たちは、自分たちが「あまらぬ」と「あらぬ」の二つの道から選択することなく、むしろそれらを判別しないまま両方ともにたどっていることを、その信念を通じて曝け出しているからである。この第一部の最後の部分で彼は、唯一の確実な道すなわち「ある」の道を踏査し、もしも何かが存在するならば、それは生成も消滅もしえず、変化することもないことありえず、またいかなる不完全さも被ることはありえないということを、演繹推論による驚異的な力業で証明する。バルメニデスの議論とその逆説的帰結は、その後のギリシア哲学にはかりしれない影響を及ぼした。したがって、彼が、その方法においても衝撃力においてもデカルトの「コギト」のそれと対比されてきたのも当然である。

バルメニデスの形而上学と認識論は、イオニアの先人たちが作り上げてきたような宇宙論の余地をなくし、それどころか、感覚がわれわれに明示する世界を信じることに對してもその余地をまったく与えていない。にもかかわらず、詩の第二の(そして保存されている量もずつと乏しい)部分で、バルメニデスは「真なる確証のない死すべき者たちの臆見」についての説明を与えている。この説明がどのような資格のもので、どのような動機をもつものなのかは、はっきりとは分らない。

### III. 序歌

288 断片1: セクストス・エンペイリコス『学者たちへの論駁』第7卷3節(1-30)

「若者よ、あなたを運ぶ雌馬たちを御する不死なる駈者たちとともに  
わたしの館に到着したあなた、ようこそ。」

25

この道を旅するようにとあなたを送り出したのはいかなる悪しき運命  
でもなく

——実際、この道は人間たちの歩く道からはるかに離れたところにあ  
る——

むしろ捷と正義がそうしたので、あなたがすべてを学ぶのは妥当な  
ことです。

まん丸い<sup>3)</sup>真理の揺るぎなきころと

死すべき者たちの真の信頼性なき臆見の両方を、

30

しかしそれにもかかわらずあなたはこれらのことをも学ぶであろう  
——信じられていることが、

どうしてあらゆることにあまねく行きわたりつつ<sup>4)</sup>確かにあらねば  
ならないのであろうかということを」。

これらの詩行におけるバルメニデスの主要な目的は、凡庸な死すべき者たちによつては獲得されることのない真理についての知識が自分にはあるのだと主張することにある。その主張は、主としてホメロスとヘシオドスに由来するモチーフにより、調和した語法と韻律で劇的に表現されている。女神のもとへのバルメニデスの旅はシャーマンたちの魔術的な旅を思い起こさせる、と言われることが時にある。ところが、先に述べたように(298ページ)初期ギリシアにシャーマンの伝統があったとするとする証拠は確実なものではない。現代の研究者たちの多くが従うセクストスは、その旅を啓蒙の寓意、すなわち「夜」である無知から「光」である知への移行と捉えた。しかしバルメニデスは、「物知る」者にふさわしく、すでに光輝の中でその旅を開始しているの

3) 「まん丸い(εὐκυκλέος)」はシンプリキオスの読み、この読みは Diels, *Parmanides Lehrgedicht* (Berlin, 1897), 54-57 が支持している。セクストスの伝える「説得力のある(εὐνεθεός)」というより容易な読みを支持する現代の研究者もいる。例えば、Mourlatos, *Route*, 151-157.

4) 「行きわたりつつ(περὸδορα)」はシンプリキオスの A 写本の伝える読み。DEF 写本では「まさに(あらゆるもので)ありつつ(περ ὄντα)」となっている。

である。叙述の要点はむしろ、突破すべき障害および目的地という、詩人バルメニデスが具体的に挙げているこの二つのもの(馬車とその動きは別として)によって暗に示されている。日常的に経験される通常の世界——そこでは夜と昼と昼が交替し、その交替は、アナクシマンドロスならこれに同意したのであろうが(資料110)、法ないしは「正義」によって支配されている——そのような世界からバルメニデスは離脱しようとしている。むしろ彼が進むのは、不変の真理と死すべき者たちの臆見の両方の超越的な理解へと至る思考の道(「大道」)である。同様に重要なのは、この目標の達成の前に立ちはだかる障害を阻む障壁は侮りがたいものではないが、しかしそれも「優しい説得」からの逃避を阻む障壁は侮りがたいものではないが、しかしそれも「優しい説得」には届くのである。

ヘシオドスの『神統記』における題材に範を求めた「昼」と「夜」の門のモチーフ、そして神による啓示というモチーフは、合理的探究と並の人間の理解力とを隔てているとバルメニデスが考える途方もない深淵と、彼自身の理性が彼に明示したことの意外性とを伝えるために精選されたものである(これら双方の点に関してはヘラクレイトスを参照のこと。たとえば資料205, 206, 210)。そして、哲学の並々ならぬ哀剣さと同時に権威を頼みとしていることを、宗教的啓示は示唆している——ただし、その権威は議論の余地のない権威であるわけではない。すなわち、女神は後で(資料294)「論争に取り巻かれた私の論駁を理性によって判定せよ」と述べている。

289 断片5: プロクロス『プラトン「バルメニデス」注解』I, p.708, 16 Cousin

……私が開始するのは共通の地点である。

なぜなら、そこへと私は再三再四もどるであろうから。

資料296-299で見られる証明のすべてが資料291で明確に述べられている選択をその共通の根拠とする、ということが少なくとも資料289の要点であるならば、この資料は、288の後と291の直前にびったりとおさまる(資料294もまた参照せよ<sup>5)</sup>)。

5) 資料289と比較されるのが次の資料である。

290 ヘラクレイトス断片103, ボルビュリオス「ホメロス「イリアス」についての諸問題」XIV.

200 目では、始まりと終わりとは共通である。

しかし、「まん丸い真理」について語っているにもかかわらず、必ずしもバルメニデスがここで彼

## IV. 真理

## (i) 選 釈

291 断片2: プロクロソ『プラトン「テイマイオス」注解』I. 345, 18, シンプリキオス『アリストテレス「自然学」注解』116, 28 (3-8行)

さあ、私はあなたに語ろう(そして私の話を聞き終えたら、あなたはそれを携えて伝えていかななくてはならない).

他に並ぶものがない、考えられるためにある探究の道を\*<sup>671</sup>.

一つは、(それは)ある、そして(それが)あらぬことは不可能である、という道。

これは説得の女神(ペイトー)の道である(なぜなら彼女は真理の女神にかしづくがゆえ)。

もう一方は、(それは)あらぬ、そして(それが)あらぬことが必要である、という道。

これはまったくもって識別不能の道であると私はあなたに言明する、というのも、あなたはあらぬものを知ることではできないであろうし——それはなされえない——

またそれを指し示すこともできないであろうから。

女神は、他に並ぶものがない、考究されるべき探究の道を、具体的に述べることから始める。これらの道は明らかに論理的に排他的だと考えられている、つまり、もし一方を取れば、それによってもう一方を取ることはできない、これらが排他的である

自身の思考は円環をなすのだと暗示しているとは限らない。

【訳注\* 「考えられるためにある(……that are to be thought of)」の訳に対応するギリシア語原文は εἶναι νοῦμαι である、この訳は、「考える (νοῦμαι)」という動詞の不定詞を、「ある (εἶναι)」の補語で目的を表わすリ格不定詞と見なすことに基づく、したがって文字通りには、「考えることのためにある」となる、これを受動表現に変えれば「考えられるためにある」という訳が得られ、これはさらに、「考えられる」という可能性を表現するものへと移行しうる、なお後掲資料292の訳も「ある+補語としてのリ格不定詞」の解釈に基づく。」

のは矛盾関係にあるからだとということも同じく明らかである(資料296, 16行:「これらがことごとくに關して判定は次のことにある。すなわちそれはあるか、それともあらぬか」を参照せよ<sup>671</sup>)。パルメニデスの動詞 εἶναι(「ある」)の文法的主語として、われわれの翻訳において補われた「それ」とは何か、おそらくそれは、どのようなわれわれの探究の主題となるものであろう——どんな探究においても、自分の主題とするものがある、あるいはあらぬと仮定しなければならぬ、ここでは、どこにないけれども中立的に「ある」と訳したが、εἶναι それ自体の解釈はさらに難しい、すぐにわかる語釈としては、存在と解するもの(「存在する」と述定と解するもの(「……である」)の二つがある、このどちらかに決しようと試みるには、εἶναι がもつても目につく形で登場してくる議論、とりわけ、資料291の5行から8行における否定の探究の道に対する反論を検討する必要がある。

あいにくこの反論を検討しても決定的な解決が与えられるわけではない、確かに、存在しないものを知ったり、あるいは指し示したりすることは不可能であるように思われる。たとえば、誰もピクウィック氏<sup>672</sup>と知り合いになることはできないし、彼を他の人に指し示すこともできない、ところがしかし、パルメニデスの前提を述定として読むこともまた、理にかなっていると思わせる、何もかでないもの、すなわちいかなる属性ももたず、そのものに当ってはまるような述語をまったくもっていないものを知ったり、あるいは指し示したりすることは、不可能であるように見える。資料296の5-21行はもっと明快である、ここでは、類似の前提——「それがあらぬということとは語られえず、また考えられえない」(8-9行)——が、生成あるいは消滅の

6) 問題: パルメニデスはさらに第一の道を「(それが)あらぬことは不可能である」、そして第二の道を「(それが)あらぬことが必要である」と明記しているが、これらは矛盾関係を構成しない、解決: おそらくこれらの付加的な説明は、二つの道を特徴づけるものではなく、二つの道が両立しないことを指摘するものである。3行目が言わんとしているのは次のようなことだろう、つまり——第一の道は「(それは)ある」である、そして必然的に、もし何かがあるなら、それがあらぬこととは事実ではない、ということになる、同じことが5行目についても必要な変更を加えた上で言える。

【訳注\* C. Dickens の初期の代表作である『ピクウィック・クラブ (Pickwick Papers)』(1836-37)に登場する主人公の名前。】

可能性に反論するのに用いられている。パルメニデスが力説しているのはこういうことである。つまり、もし何ものが生成するならば、それは以前にはなかったにちがいない——そしてそのときそれについて「それはあらぬ」と言ってもそれは正しかつたであらう。しかし前提はまさにそう言うのを禁じている。だから生成するということはありえない。ところでこの文脈での「生成する」は明らかに「存在するにいたる」と解釈される。したがって、この場合、「あらぬ」は「存在しない」を意味することになる。

しかしながらパルメニデスは、すぐに続けて資料296の10行目で、存在しないもの（もちろん、「ある」が「存在」を意味するものと仮定してのことだが）を「無」（資料293, 2行目を参照せよ）と呼んでいるのである。このことが示唆しているのは、彼が非存在を、まったく何もかもあらぬこと、すなわちいかなる属性ももっていないこと、と理解しているということである。だから、彼にとつて存在するということは要するに何らかのものであるということなのである。後で（たとえば、資料297の22-25行、資料299の46-48行で）彼が分詞形  $\epsilon\acute{\omicron}\nu$ （「あるもの」）を用いるとき、それを「實在」あるいは「實在的なもの」と解釈する方が、存在を顯然と意味しているとは解釈するよりも、はるかに容易である。そして、何らかのものを實在的とするのは確かに、そのものに当てはまる何らかの述語（たとえば、「空間を占めている」といった述語）をそれがもっているということである。もしこの方向での解釈が正しければ、パルメニデスによる  $\epsilon\acute{\omicron}\tau\tau\upsilon$ （「ある」）の用法は、（カーク／レイヴンが考えたように）存在的用法であると同時に述定的用法でもあることになる。ただし、だからといって（カーク／レイヴンが結論したように）両者の用法が混同されているというわけでもない。存在しないものを知ることはできないということから直接にパルメニデスが引き出すのは、否定の道が「識別不能」である、すなわち、存在否定の言明によってはいかなる明断な思考も表現されないという結論である。われわれはその要点を次のように言い表わすこともできよう。「何でも自分の好きな探究の主題（たとえば、ピツクウィック氏）を選びなさい。その場合、「ピツクウィック氏は存在しない」という命題は真正な思考をまったく表現していない、なぜなら、もしそれが真正な思考ならば、その主題であるピツクウィック氏と知り合うことができなくてはならないだろうからである。ところが、ピツクウィック氏が存在するのでない限り、その可能性はな

い——そしてピツクウィック氏が存在するというこのことは、まさしくその命題が否定しているものなのである。こうした趣旨の議論は、いろいろと姿を変えつつ、プラトンからラッセルに至るまで多くの哲学者たちを強く惹きつけてやまなかった。その結論はパラドクスのようであるが、よくできたすべてのパラドクスと同様、それは、用いられている諸概念について——とりわけこの場合は、意味と指示と存在の関係について——のわれわれの理解のありようをより徹底的に吟味するようわれわれに強いるのである<sup>7)</sup>。

## (ii) 死すべき者たちの誤謬

293 断片6: シンブリキオス『アリストテレス「白然学」注解』86, 27-28; 117.

4-13

語られかつ考えられるためにはあらねばならない<sup>\*誤註</sup>。なぜ

なら、それはあるためであるが、

7) 資料291の8行目は半行で終わっているが、原文校訂者たちはこれを、まったく異なった出典でしか知られていない次の断片で補充することが多い。

292 断片3: クレメンヌ『雑録集』第6巻第23章、プロテイノス『エンネアデス』第5巻第1章8節 なぜなら同じものが考えられるためであるとともにあるためであるから (τὸ γὰρ αὐτὸ νοεῖν ἔστιν τε καὶ εἶναι) .

このように翻訳すると（ただし、「思考と存在は同じである」と訳す研究者もいる）、それは確かにこの個所にびつたりと合うかのように思われる。資料293の1行目からはつきり分かるのは、明らかにパルメニデスが、否定の道に対して反論する文脈において、単に知られるものだけでなく、考えられるものに関する考察を展開していることである。しかし、もし資料292が291に続くこととすると、プロクロスもシンブリキオスもそれを資料291の最後に引用していないというのは意外である。そして、それが資料291の6行から8行での推論にどのような寄与を付加しているのを見とどけることは困難である。（もし  $\nu\omicron\sigma\tau\upsilon$ （「考える」）がここで、たとえば C. H. Kahn (*Review of Metaphysics* 22(1968-69), 700-724) が考えているように、「知る」を意味するならば、その場合、おそらく資料292は単に291の7行から8行を別の形で言い換えたものということになる。しかし  $\nu\omicron\sigma\tau\upsilon$  はパルメニデスによって、語ることを意味する諸々の単純な動詞（資料293, 1行目、資料296, 8行目、なお資料296, 17行目の  $\acute{\alpha}\nu\omicron\sigma\tau\upsilon\omicron\upsilon\upsilon\omicron\upsilon\upsilon$  「名前のない」を参照せよ）と対比的に用いられており、それゆえ、「考える」と訳すべきである。）

<sup>2)</sup> 誤註\* 英語原文は “What is there to be said and thought must needs be” で、対応するギリシア語原

無はそうではあらぬから、私はあなたにそれをよくよく考えるよう命じる。

というのも、これは、私があなただをそこに進まないよう引き止める最初の探究の道だから、

しかしその次に私は、死すべき者たちが何も知らないで  
双頭のまさままよひ歩く道からあなたを引き止める。なぜならば、彼らの胸の中で、

困惑がとりとめもなくさまよひ考えを導くからである。そして彼らは、耳も聞こえなければ目も見えず、呆然として、判別する力のない群と

なって引き立てられる。  
彼らは、あるとあらぬが同じであり同じでないと信じている。  
そして彼らすべてがたどる道は反対方向に向いている。

否定の道へのバルメニデスの反対論の要約 (1-3行) ——要するにどんな思考の対象も実在する対象でなければならぬということ述べているものだが——は、その曖昧さにもかかわらず、バルメニデスによる「あらぬ」の排除が、真正な思考の内実となりうるものが何であるかという関心に動機づけられていることを確認するものである。それに続くのが、死すべき者たちのたどる探究の道と認定される第二の誤った道に対する警告である。資料291では、この第三の道にまったく触れていなかったが、その理由ははっきりしている。女神がそこで具体的に述べていたのは、理性的な探究者がどちらを取るかを決定しなくてはならない論理的に首尾一貫した二者択一の選択肢であった。これに対して第三の道とは、単に、大多数の死すべき者たちのように、自分の批判能力を行使しないために (資料293, 6-7行) その決定を下さない場合

文は  $\chi\rho\eta\ \tau\acute{o}\ \lambda\acute{\epsilon}\gamma\epsilon\iota\nu\ \tau\epsilon\ \nu\acute{o}\epsilon\iota\nu\ \tau\epsilon\ \epsilon\acute{\iota}\nu\ \epsilon\mu\epsilon\iota\nu\alpha\iota$  である。この英訳の上語部分も、資料291 (2行目)、292と同様に、二つの不定詞「語る」と「考える」( $\lambda\acute{\epsilon}\gamma\epsilon\iota\nu\ \tau\epsilon\ \nu\acute{o}\epsilon\iota\nu\ \tau\epsilon$ ) を「ある (もの)」(ここでは分詞形  $\epsilon\acute{\iota}\nu$  で、不定詞  $\epsilon\mu\epsilon\iota\nu\alpha\iota$  (「ある」) の意味上の主語となる) の補語で目的用法不定詞と解することで得られる「語りかつ考えるためにあるもの」を受動表現に変えたものである。これはさらに「語られ考えられるもの」とも解される。この解釈とは別に、「あるものがある」と語りかつ考えなくてはならない」と読む解釈も有力。このほか、「あるものについての思惟と言説はあらねばならない」。「語る」と思惟することはあるものでなければならぬ」といった解釈の提案もなされている。

(資料293, 7行目)、いつの間にか自らがたどっていることに気づく、そのような道にすぎない。ふと気がついてみると、ものがあるということと同時にそれがあらぬということ (たとえば、変化と生成を認めることによって) 自分が目にしたり暗に意味してたりする。そしてそのことで、資料291で区別されていた二つの道の一方から他方へと途方に暮れてさまよひ歩くことになる。したがって、その歩みは「反対方向に向いている」。つまり矛盾したものになろう。もちろん、「ある」と「あらぬ」が同じでないということをはわかるだろうが、しかし、そのどちらを取るべきかを決めることができないために、それらあなたも同じものであるかのように扱うことになるのである。

資料293の後には、たぶん少し間を空けて、女神がバルメニデスに対して、第二の道に対する彼女の論駁について (資料293で退けられた死すべき者たちとは異なって) 判定を下すように命じる次の断片が続いていただろう。

294 断片7: プラトシ 『ソピステス』 242A (1-2行), セクストス・エンペイリコス 『学者たちへの論駁』 第7巻114節 (2-6行)

なぜなら、あらぬものどもはある、ということは何としても主張

されてはならないから、

むしろあなたは探究のこの道からあなたの考えを引き止めなくてはならない。

また、多くの経験から生まれた習慣が、あなたに

目標をもたぬ眼や無意味な音で満ちている耳と

舌とを用いさせることで、あなたを強制してこの道を行かせるようにさせてはならない。

私から語られた、論争に取り巻かれた論駁を、理性<sup>\*誤中</sup>によって判定せよ。

[訳註]\* 原語は  $\lambda\acute{o}\gamma\omicron\varsigma$  (ロゴス) であるが、バルメニデスの時代に「理性」の意味でこの語が用いられている例はない。「判定せよ」と言われているその対象からすると、ここは「理 (ことわり)」ないしは「論理」の意味で解することも可能。]

## (iii) 真理のしるし

295 断片 8, 1-4 行: シンプリキオス『アリストテレス「自然学」注解』78, 14; 145. 1

なお残っているのは、それはある、とする道についてのただ一つの説明である。この道には非常に多くのしるしがある。

すなわち、それは不生にして不滅であり、

全体としてあり、ただ一つの種類で、揺らぐことなく、完全である<sup>8)</sup>。

もし「あらぬ」の道を避けなくてはならないのなら、探究者としてのわれわれの唯一の希望は、「ある」の道を追い求めることにしか存していない。もしわれわれがこれらの選択肢を採るなら、一見、われわれには無限の説明可能性がそこに開かれていられるように思われるだろう。つまり、われわれが研究する主題となるものはどれも存在してはならないとする要件は、その主題に関してわれわれが何を発見しようにしても、それに対してほとんど何の制限も加えることがないように見えるのである。そして、考えられうるものは存在しなくてはならないという議論(資料 293, 1-2 行)は、ネズミやレストランだけでなくケンタウロスやキマイラ<sup>9)</sup>も含めて、探究の主題となりうるものの範囲がとてつもなく広大であるかのようには思わせるのである。しかし、ほんの 49 行の中で、バルメニデスはこの無限の可能性をまさしくただ一つの可能性に縮減するのに成功している。なぜなら、資料 295 でプログラムのように列挙されている「しるし」は、実際に、探究の主題となるものならどれも満たさなくてはならないさらなる明確な諸要件を構成しているからである。そしてそれらの要件は、或るものについて、それが存在すると語ることと両立しているのはいったい何であるか、ということを解明する上でとてつもない制約(後掲資料 296 と 298 で現われる鎖の隠

8) ギリシア語原文は ἡδὲ τέλειον である。シンプリキオスの語訳本では ἡδὲ ἀτέλειον (「無窮である」とある。校訂案については G. E. L. Owen in *Studies in Presocratic Philosophy* II, ed. R. E. Allen and J. Furlley (London, 1975), 76-77 を見よ。Owen はまた、ἐστὶ γὰρ οὐλομελέτε καὶ ἀρπεμέε (「完全であり不動である」: プルタルコスによる) というカーク/レイヴンの読み(デューリス/クラランツを承けたもの)も、説得力のある仕方で行っている。

[訳注\* ケンタウロスとは馬身で腰から上が人間の姿をした怪物であり、キマイラとは頭がライオン、尾が蛇、胴体が山羊の、口から火焔を吐き出す怪物。]

験に注意せよ)を課するのである。これらの諸要件を論じるこの後のバルメニデスの議論は、結局のところ一元論の一形態である。すなわち、確実に明らに出されるのは、あるものすべてが同一の性質をもたなくてはならないということである。そして、一つの全体としての実在以外に何かが実際にそういう性質をもちうるのかどうか疑わしいのである。

## (iii) a. 不生にして不滅

296 断片 8, 5-21 行: シンプリキオス『アリストテレス「自然学」注解』78, 14; 145. 5 (資料 295 の続き)

それはあったことなく、あるだろうこともない。それは、すべて全体として、

一つで連続したものとして今あるのだから。なぜなら、あなたはそれについてどのようにな生まれを探究するというのか?

どうして、またどこからそれは成長したのか? あらぬものから、とあなたが言うことも考えられることも私は許さないだろう。

なぜならそれがあらぬとは、語られえず考えられえないから、

そして、どのような必要がそれを駆り立てて、無から始まって、

より前よりもむしろ後に成長するようににしたというのか? 10

かくしてそれは、全くあるか全くあらぬかのいずれかでなければならぬ。

また、確証の力が、それに並んで何か<sup>9)</sup>があらぬものからいつか生成することを

許しはしないだろう。したがって、正義の女神がその足かせをゆるめてそれが

生成したり消滅したりするのを許したことは一度もなかったものであり、むしろそれをしつかりとつかんでいるのである。そしてこれらに関する

9) 多くの研究者は Karsten と Reinhardt に従って、肯定辞 ἦν を冠詞属格 τοῦ に改訂し「あるものから」とする。

る判定は、

それがあるかそれともあらぬか、というこのことにある。しかし、実際に必然のこととして、

考えられず名もなき一方の道から離れ（なぜならそれは真の道ではないから）、もう一方の道があり、真正のものであるということが決せられた。

また、あるものがどうして未来においてありえようか？ どうしてそれが生成しえようか？

20  
 というのも、もし生成したのであれば、それはあらぬし、未来においていつかあることになるとしても、それはあらぬから、  
 かくして、生成することとは消去され、消滅するということはその消息が開かれることもない。

以上の詩行が意図しているのは（結論である21行目が示しているとおおり）、あるものは生成することも消滅することもありえないということの証明である<sup>10</sup>。ハルメニデスは、生成に対する明確な反論だけをまとめることで満足しているが、それは、生成反対論と相似する消滅反対論は明らかに類推によって構成できるだろうと考えてのことである。彼は「どうして、またどこからそれは成長したのか？」（7行）という二重の問いに対応して二つの主要な考察を押し進める。彼は、「どこから？」という問いに対する唯一の合理的な答えは「存在しないものから」という答えしかありえないと想定するが、彼はこれを「あらぬ」に対する反論（7-9行）によってすでに除外されたものとして排除する。また彼は、「どうして？」の方を論じるに当たっては、「充足理由律」に訴える。つまり彼の想定によれば、生成するものはどんなものも、その

10) ハルメニデスは5-6行において、これよりもさらに先に歩を進めているように見える。「それはあったことなく、あるだろうこともない、それは、すべて全体として、今あるのだから」という言明は、単にあるものが存在するようになる（生成する）ことはないだろうということだけでなく、それは未来において全然存在することがないだろうということも主張しているように思われるのである。おそらく、ハルメニデスがあるものに帰するつもりでいるのは、いかなる種類の時間的区分にも従うことのない永遠の現在における存在性であろう。彼が資料296の議論の中でこの結論に対してどうやっやその根拠を与えたいと考えていたかはまったく不明である。

生成を説明するに足る何らかの発生の原理（「必要（*xpéoc*）」をその内に含んでいないくはならない。ところが、もし何かが存在しないならば、そのような原理をどうしてそれが含みうるであろうか。

iii) b. 一にして連続

297 断片 8, 22-25 行：シンプリキオス『アリストテレス「自然学」注解』145, 23  
 （資料296の続き）

またそれは分割されることもない、それはすべてが一様のものとして

存在しているから、

それは、あるものが繋がり合うのを妨げることになるような、ここでより多く

そこでより少ないということもなく、むしろそれは全体としてあるもので充ちている。

だからそれは全体が連続している、なぜなら、あるものはあるもののに密接しているから。

ハルメニデスがここで念頭においている連続性とは空間的なものなのだろうか、時間的なものなのだろうか、あるものはその占めるどんな次元においても連続している、ということを示すところは彼の意図があるのは確かである。しかし、それが時間の中に存在するというのは、おそらく資料296がすでに否定していたことである。要点は単に、どんな探究の主題も、内的連続性によって特徴づけられなくてはならないということなのだろうか、あるいは、ハルメニデスはもつと野心的に、実在はすべてであるとして主張しているのだろうか、彼が意図しているのは先鋭的な命題の方ではないかという印象には抗しがたいものがある。もっとも、彼が自分にその説を唱えるだけの資格があると考えている理由が何なのかははっきりしない（おそらく彼は、たとえ、あるものを他のあるものと区別する基準はない、とする不可識別者の同一性に依拠しているのであろう）。同じ曖昧さは、資料298と299にも影響しており、出てくる判断も同じである。

## (iii) c. 変わりえない

298 断片 8, 26-31行: シンプリキオス『アリストテレス「自然学」注解』145, 27  
(資料297の続き)

しかし、それは大いなる縛めの中で変わることのないものとして、始まることも終わることもしなかに存在する。生成と消滅ははるか遠くへとささまよいき、真なる確信がそれらを追放したからである。

それは同じものとして同じ場所にとどまりながら、それ自身で横たわり、

そしてそのように固定されたものとしてとどまるであろう。なぜなら、

30

力強き必然の女神が

限界の縛めの中でそれを保持し、この限界がそれをあらゆる側から閉じ込めているからである。

26行から28行は次のような議論を示している。つまり、

(1) あるものが生成したり消滅したりするのは不可能である。だから、

(2) 限界の縛めの中でそれは変化することなく存在する。

そうして29行から31行は当然、(2)の内容をより十全に詳説するものと解釈される。このように解すると、それらは、(1)を前提とした、より複雑な次の推論を示していることになる。

(2a) それは、あらゆる側からそれを閉じ込めている限界の縛めの中で保持される。だから、

(2b) それは同じものとして同じ場所にとどまり、それ自身の力で横たわる。

パルメニデスがここで用いている限界という概念は判然としない。もつとも容易な理解は、それを空間的限界と見ることである。そしてその場合、(2b)は(2a)からわかりやすい形で帰結する。しかし、この解釈では、いつたいなぜ(2a)が(1)から帰結するのだろうか、おそらく「限界の中で」はむしろ限定性を表現する隠喩的な語り方なのであろう。そうすると(2a)においてパルメニデスは、あるものが、現在のそのあり方と——どんなときであれ、あるいはどんな点においてであれ——異なった

ものになる可能性をまったくもっていないと主張していることになる。

## (iii) d. 完全

299 断片 8, 32-49行: シンプリキオス『アリストテレス「自然学」注解』146, 5(資料298の続き)

したがって<sup>11)</sup>、あるものが不完全でないのは正当なことである。

なぜなら、それは欠けてはいないから。もし不完全なら、それはあらゆる点で欠けていることになるだろう。

同じものが、考えられるためにあるとともに、思考がそのゆえにある

ところの当の理由でもある。

なぜなら、あなたは、これまでに言われてきたすべてにおいて<sup>12)</sup>、

35

あるものなしに

思考することを見出すことはないだろうから。というのも、あるもの

に並んで何か他のものが

現にあることもこれからあるだろうこともないからである。運命の女

神(モイラ)が、

全体としてあり不変であるようにそれに足かせをつけたためである。

したがって、それには、

死すべき者たちが真であると信じて立てたすべての名前

40

——つまり、生成することと消滅すること、あることとあらぬこと、

場所を変えることと明るい色に変わること——が付けられてきた<sup>13)</sup>。

11) οὐνεκενを「したがって」の意と解することについては、資料296, 13行目の τοῦ εἴνεκεν(「したがって」)を参照せよ。叙事詩的用法では「なぜならば」の方がより慣用的な意味であり、ここでは多くの研究者がこちらの意味の方を望ましいものとしている。

12) この箇所は、「(あなたは) 思考することがそこにおいて表現されるところの(あるものなしに……)」とも試されうる。

13) 「名前が付けられてきた(ὀνομαστῶν)」はシンプリキオス(『アリストテレス「自然学」注解』87,

1) E写本の読み、写本DFでは「信じて定めたものは) 名前であろう(ὄνομα ἔσται)」とある。Mourielatos, *Route*, 180-185. M. F. Burnyeat, *Philosophical Review* 91 (1982), 19 n. 32を参照。

しかしもっとも外の限界があるので、それは、完全である。ちやうど、あらゆる側においてまん丸い球のかたまりのようなもので、中心からあらゆる方向に均等に釣り合っている。なぜなら、ここあるいはかしこで、

幾分なりともより大きくまきよ小きくあつてはならないから。 45

なぜなら、それは、それが似たものに達するのを妨げるであろうような非存在ではなく、

また、ここではより多く、そこではより少なくあるというような仕方で

存在しているでもないからである。なぜならそれは全体が侵されることのないものだから。

なぜなら、それはあらゆる方向においてそれ自身と等しく、その限界内で一様に存しているから。

「真理」の部の掉尾を齎る、長く理解しにくいこの箇所は、詩の第一全部の要点説明と、実在の完全性をその限定性から導き出す議論（これが十分に論じられているのは、42-49行であり、それは、カーク／レイヴンがそうだが、32-33行——通常は資料298の一部と考えられている——と34-41行のいずれともままたく違つて一連の思考を示すものと見なされることが多い）とを組み合わせたものである。バルメニデスは、あるものも有限であったり限定されているなら、欠けているはずはなく、まともし欠けていないのであれば不完全であるはずはない、という彼の中心となる議論の概要をまず始めに手短かに述べる(32-33行)。それから彼は、われわれを彼の元々の出発点へと連れ戻す。つまり、もし何らかの探究対象について考えているのであれば、何かあるものについて考えているのでなければならぬ(34-36行)。すでに生成しつつあるものとは別に何かについて考えることもできると思われるかもしれない。しかし、あるものは完全にかつ変わることなく存在することなく、それはけつして生成の過程にはない、ということが議論から明らかになった(36-38行)。だから、「生成する」とか「変化する」といったような死すべき者たちが用いる表現も、実は、(彼らの誤った意図にもかかわらず)完全で不変の実在のみに関係しうるのである(38-41

行)。実際、あるものは有限であり、あるいは限定されているという事実から、われわれはそれが完全であると推論できる(42-44行)。なぜなら、あるものもつ限定性は、単にそれが生成と変化を被る可能性を排除するだけでなく、その実在性において、どんな種類の不完全性をも被る可能性を排除しているからである(44-49行)。

またしてもわれわれは、「限界」をめぐって、字義通りの解釈と隠喩的解釈のいずれを選ぶべきかという厄介な選択に直面しており、またしても議論が要求されているように思われるのは、何らかの形の限定性のみであり(資料296, 14-15行を参照)、またしてもその語がもつ空間的な含みは無視しがたい——実際、それはわれわれの注目を引いてやまない(「もっとも外の限界」という表現の付加形容詞  $\rho\acute{\alpha}\mu\alpha\tau\omicron\nu$  に注意せよ)。そして、実在が空間的に延び広がっていかつまた限定されたものであるなら、それは空間的拡がりにおいて有限のものでなくてはならない、とバルメニデスが結論を下していると思像するのまたやすい。結局われわれは、この語の文字通りの読み方と隠喩的読み方の両方を不承不承に受け入れなくてはならないのである。

かくして「ある」の道の探究は「あらぬ」の考察の結果と同じほど意外な結果に至る。資料299におけるバルメニデスの最終的な立場は実のところ二重に逆説的である。彼は、世界についてわれわれが信じているあらゆることの論理的整合性を否定するだけでなく、実在全体を有限の球とすることで、逆にそれ自体の整合性が疑われなくてはならないようなそんな観念を導入しているのである<sup>14)</sup>。

## V. 死すべき者たちの臆見

### (1) バルメニデスによる説明の資格

300 シンブリキオス『アリストテレス「白然学」注解』30, 14 (資料299の続き。シ

[14] その球の限界が限界として機能しうるなら、それを越えた外側には本当の空虚な空間がなくなってしまうのではないか、という反論がある。バルメニデスが、限界という隠喩(すなわち、われわれなら隠喩であると見なすであろうところのもの)をどうやら無批判なままに利用しているがゆえに、われわれは彼が実在を球と信じていたにちがいないと考えてしまうのだが、仮にもそういうことではないとすれば、先の反論はわれわれに、バルメニデスが実在を球と考えていたはずはないと納得させるであろう。

ンプリキオス同書146, 23 参照)

バルメニデスは理性の対象から感覚の対象へと、あるいは彼自身のことばでは、真理から臆見へと移行しているが、その際、次のように述べている(断片 8, 50-52 行)。

ここで私は真理に関する信頼できる私の言説と考えを

50

終わりにする。これからは、死すべき者たちの信念を学びなさい。

わたしのことばの欺瞞に満ちた構成を聞きながら。

これからの女神の説明は確かに信頼できず欺瞞に満ちたものとなるが、その理由も主として、それ自体完全に混乱している様々な信念を、あたかも秩序立っているものであるかのようにならぬように彼女の説明が提示するからである(資料 293 参照)。詩の後半部は、流布していた宇宙世界に関する臆見をただ単に記述し、あるいは分析するだけのものではなかった。それは、念入りに仕上げられた特色ある神統記と宇宙論——そこにはヘシオドスを想起させる部分もあれば、アナクシマンンドロスを想起させる部分もある——を含んでいた。これから見えていくように、バルメニデスの目的は、死すべき者たちの臆見を実際にありのままに示すことではなく、ありうべき最善のものとして示すことにある。しかしそのことによつて女神の説明はさらに別の意味において欺瞞的なものとなる。要するにそれは、實在に関して(本当に説得力があるわけではないが)理にかなっている人と人を欺いてみせる描写を与えているのである。

バルメニデスの宇宙論と死すべき者たちの臆見一般との関連をもっとよく理解するために、われわれは資料 301 の最後の二行を検討する必要がある<sup>15)</sup>。

301 断片 1, 28-32 行：シンプリキオス『アリストテレス「天体論」注解』557, 25 (資料 288 より)

あなたがすべてを学ぶのは妥当なことです。

まん丸い真理の揺るぎなきころと

15) 原文、翻訳、解釈、いずれにおいても議論百出の箇所である。Mourelatos, *Route*, 第 8 章を見よ。主たる問題は、31-32 行が死すべき者たちの臆見の信頼性を救済しようとしているように見える点である。これは、彼らの臆見にいかなる真実性もないとすると第 30 行の主張ときわめて明白な矛盾を呈する。その解決は、31-32 行の教示の内容を嘘偽りと解釈することであり、実際、資料 300 でははっきりと示されている(資料 301 の原型であるヘシオドス『神統記』26-27 行を参照のこと)。

死すべき者たちの真の信頼性なき臆見の両方を。

しかしそれにもかかわらずあなたはこれらのことをも学ぶであらう——  
信じられていることが、

どうしてあらゆることにあまねく行きわたりつつ確かにあらねばなら

ないのであらうか、ということ。

31-32 行は当然、死すべき者たちの信念が対象としているものの真の实在性が確保されるための条件、すなわちそれらの対象があらゆるものに完全に行きわたっているという条件を述べているものと解釈される。この条件は、探究の主題となるものほども完全に存在してはならないという「真理」の部における要件と酷似している。バルメニデスが 31-32 行で誤っていると見なしているのは、女神によるその条件の詳述ではなく、その条件が死すべき者たちの信念の諸対象によって満たされるのだという彼女の主張である。結果として、詩の第二部の宇宙論は、死すべき者たちが信じている世界に新たな解釈を与えられるものとして読みわたっているという条件を満たすものことになる。そこでのことばは、あまねく行きわたっているという条件を満たすものとして(誤ってはいるが興味をそそる仕方)世界を説明する。

#### (ii) 光と夜

302 断片 8, 53-61 行：シンプリキオス『アリストテレス「自然学」注解』39, 1 (資料 300 の続き)

なぜなら彼らは、二つの形態に名前を付けようと決心したからである。

彼らはそれらの一つさえ名前を付けてはならない<sup>16)</sup>のに——そこに

16) これに代わる訳として次のものがある。(a)「一方に名前を付けてはならない(もう一方については正しいのだが)」。この場合、バルメニデスが「あるものの側に熱を、あらぬものの側にもう一方を配している」(『形而上学』987a1)とするアリストテレスの説明(ただしこれは誤っている。資料 303 を見よ)に従うなら、不正を咎められるのは「夜」あるいは「あらぬもの」(この考え方は穿ちすぎ)と同定される。(b)「一つだけに名前を付けてはならない」。シンプリキオスにならぬもので、カーク/レイヴンがこれを採用。しかし死すべき者たち一般はむしろこの過ちを避けている。彼らの言説は、資料 302 からはっきり分かるように、相反関係を表わす表現に満ちている。なお詳しくは、たとえば次のような文献を見よ。A. A. Long in Furley and Allen (eds.), *Studies in Presocratic*

において彼らは道に迷ってしまった。  
 そして彼らはそれらを外見において正反対のものとして区別し、それらに対して  
 55  
 相互に異なるしるしを与えた——一方には、天空の火の炎を、  
 これは、穏やかでとても軽く、あらゆる方向においてそれ自身と同一であるが、  
 もう一方のものとは同じでない。そしてその片方のものもまたそれ自体において  
 まさしくこれと正反対のものであり、暗い夜で、その外見において濃  
 60  
 密で重い。  
 これらの全構造を、私はあなたに妥当なものと思えるように語る。  
 そうすれば、死すべき者たちのいかなる考えも必ずやあなたを追い越  
 することはないのであるから。

303 断片9: シンブリキオス『アリストテレス「自然学」注解』180.9  
 しかし、すべてのものが光と夜と名付けられた、  
 またそれらの力に応じて様々なものがこのものやかのものに割り当て  
 られたので、

すべては同時に光と暗い夜とで充ち、  
 どちらも等しい。なぜなら、いずれも無を分けもつことはないから。  
 資料302-303では、特定の前提が提出され、この前提によってパルメニデスは、死  
 すべき者たちの臆見を救済するためにできる最大限のことをしようとする。彼の申し  
 立てによると、死すべき者たちの臆見は、基本的に相互に還元されえない二つの感覚  
 的形態に対する信念を基盤として、その上に築かれている。これらの形態にはそれぞ  
 れに、「真理」の部において探究の主題に必要とされた限定性と同様のものが帰され  
 ており、またそれらとともに、實在全体に浸透しているという資料301、31-32行の  
 条件を満たすものである。その他のものは、単に光あるいは夜の（あるいはおそらく

Philosophy II, 82-101. Mourciatos, *Route*, 80-101. D. J. Furley in *Exegesis and Argument*, ed. E. N. Lee et al. (*Phronesis* Supp. Vol. I), 1-15.

両方の) 顕示と見なされており、いずれか一方の形態と結びつけられた特定の力に  
 よって特徴づけられる。

「光」と「夜」という名前の採用は恣意的な決定であるが、これまでその虚構は、  
 死すべき者たちによって信じられていたような世界がいかにして存在しうるのかを説  
 明するのだと解釈されたこともあった。しかしこれは受け容れがたい解釈である。  
 もしもそれは、彼らの信念の認識論的特性を印象的に表現しているのである。死す  
 べき者たちの臆見は、彼らが客観的真理を発見したということを反映するものではな  
 い。だから、唯一のとるべき解釈の道は、その臆見を、人間の心が人念に仕上げた様々  
 な慣習の産物と解することである。ところで、当然の帰結として出てくるのは、いつ  
 たいなぜ死すべき者たちがそのような慣習をもっているのか、あるいは彼らはどうい  
 う理由でそれらの慣習に特定の内実を附与しているのか、という疑問に対して、これ  
 のいかなるものも説明を与えることができないということである。したがって、これ  
 らの慣習を容認することは、恣意的な決断によるものとしか言えない。

後掲資料305-307と次に掲げるプルタルコス<sup>註</sup>の証言（これは臆見における主な論題  
 を示している。断片11<sup>註</sup>、シンブリキオス『アリストテレス「天体論」注解』559、  
 20を参照のこと）から判断すると、パルメニデスが、自然学的な説明において光と  
 夜をきわめて体系的に使用していたのは明らかである。

304 プルタルコス『コロテス論駁』13節1114B (DK28B10)

パルメニデスは実際に秩序づけを行ったのであり、また基本要素としての明る  
 いものと暗いものとを混合することにより、それらから、そしてそれらによって、  
 すべての感覚的な現象を作り出している。なぜなら彼は、大地について、そして  
 天空と太陽と月について、多くのことを語ったからである。また人間たちの発生  
 についても詳述している。また、誰か他人の書物のあら探しをしたりせずに、自  
 分自身の書物をまとめた古代の自然哲学者にふさわしく、彼は、重要な論題はど  
 れ一つとして論じないでおくことはなかつた。

註\* 断片11: 「いかにして大地と太陽と月とが、またものみなに行きわたるアイトール（上層気）  
 と天の川と洋なるオリュンポスと星々の熱い力が動きを与えられて生じてきたか。」

女を送って男と交わらせ、そして今度は逆に男を送って女と交わらせながら、

307 アエティオス『学説誌』第2巻第7章1節 (DK28A37)

バルメニデスの主張によると、互いに複雑に絡み合った円環があって、一方は希薄なもので形成され、もう一方は濃密なもので形成されている。そして、これらの間に、光と闇から混成されている別の円環がある。そして彼の言うところでは、それらすべてをさながら壁のように取り囲んでいるものは、その本性において堅固である。その下には火の円環がある。そして同様に、それらすべての真ん中にあるものは堅固である。そしてその周りにまた火の円環がある。混じり合った諸円環の中央にある円環が、それらすべてにとっての運動と生成の第一原因であり、彼はそれを、すべてのものの舵を取る女神、鍵の保有者、正義の女神ダイケー、そして必然の女神アナケンケーと呼んでいる。彼の主張では、空気は、大地のより強い圧縮により蒸発させられて、そこから分離される。太陽は火の蒸発で、銀河の円周もまたそうである。月は空気と火の両方から構成されている。アイテールはもつとも外部にあって、すべてを取り囲んでいる。それに続くのが火の性質をもつもので、われわれはこれを空と呼んでいる。そして最後に来るのが大地の領域である。

資料305が、天空に関する詳細な説明を導入する個所の一部分をなしていたことは明らかである。それは、「真理」の部をふまえていると思われる表現で満ちている。たとえば、「取り囲んでいる」天空(資料298, 31行参照)、「星々の限界」(資料298, 26行, 31行および資料299, 42行, 49行参照)、そして、どのようにに天空を「必然の女神が束縛していたか」について語っている個所(資料296, 14行および資料298, 30-31行参照)がそうである。それらがそそうと意図されているのはおそらくこういうことであろう。つまり、死すべき者たちの臆見を救済しようとするならば、その臆見が抑え上げた世界像をわれわれが描写するとき、それは、われわれの真実在の説明で用いられる描写に可能な限り近接した描写でなくてはならない。

バルメニデスの天文学説に関するわずかに残された証拠も、非常に短く(資料306)またきわめて不明瞭である(資料307)ために、その奇抜な「花冠」ないし円環の説

バルメニデスは、光と夜とを宇宙論的原理として選ぶことの正当性について理にかなった説明を与えてはいないが、その一方で、おそらくヘシオドスの『神統記』123行以下(資料31)に倣っているという自覚はもっていたであろう。これは確かに、バルメニデスがエロース神の起源(断片13<sup>\*註</sup>、資料31, 116-122行を参照)そして戦いの神と争いの神(キケロ『神々の本性について』第1巻第11章28節, DK28A37; 『神統記』223-232行を参照)を論じる際に手本となっていたものである。

### (iii) 宇宙論

305 断片10:クレメンス『雑録集』第5巻第138章

そしてあなたはアイテール(上層天)の本性とその中のすべての

しるし(すなわち星座)と輝く太陽の清澄な

たいまつの破壊的な働きと、そしてそれらがどこから生じたのかを知るであろう。

そしてあなたは丸い目をした月の気まぐれに歩む動きと、

月の本性とを聞き知るであろう。さらにまたあなたは、周囲を取り巻く

天空と、

それがどこから生まれてきて、どのようにして必然の女神(アナケンケー)が星々の限界を保持するために

天空を導きつつ束縛しているかも知るであろう。

306 断片12:シンブプリキオス『アリストテレス「自然学」注解』39, 14および31,

13

より狭い円環は混じり気のない火で充たされており、

それらに続く円環は夜で充たされている。しかしそれらの中に炎の分け前が注ぎ込まれる。

そしてそれらの真ん中にすべてのものの舵をとる女神がいる。

なぜなら彼女は、すべてのものの憎むべき誕生と交わりを支配するからである。

[訳註\* 断片13:「(その女神は)あらゆる神々の中でまずエロースを工夫して創りだした。」]



断片 16 の意義が増すのは、死すべき者たちの臆見を却下する最後の論評と解される場合である。「真理」の部では、真正な思考はその思考の対象である存在とある意味で同一視されていた。しかし死すべき者たちの臆見は人間の心がこしらえ上げたものにすぎず、実在によって規定されているのではない。今や死すべき者たちの思考は、人体内の光と夜の割合と相関関係にあるものとして、彼らがこしらえ上げたままにその形態によって還元的に「説明」される。

むすび

312 断片 19：シンプリキオス『アリストテレス「天体論」注解』558.8

このようにして、信念によれば、これらのものは生成し、そして今あり、

この後将来において成長した上で終滅に至るであろう。

そしてそれらに對して人間たちはそれぞれを区別するために名前をおいたのである。

313 断片 4：クレメンス『雜録集』第5巻第15章5節

しかし、離れてはいるが心には確実に現前しているものを見なさい<sup>18)</sup>。

なぜなら、あなたは、あるものがあるものと繋がっているのを自分で切り離すことはないだろうから、

あらゆるところにあらゆる仕方でも秩序立って [つまり、宇宙的顺序をなして]

散在しているにせよ、

一つにまとまっているにせよ、

女神は、真理を考究せよという資料 313 の曖昧な勧告で、死すべき者たちの臆見の内実に関する自らの説明 (資料 312 で締めくくられる) を終えていたのかもしれない。あれほどに念入りな説明がどうして詩の中に含まれていたのかということとは謎のまま

【註】\* この一文もまた、原文、解釈ともに様々に論じられているものであり、他には、「現前してはいないものも現前しているものも知性により同じようにしつかりと見よ」、「現前してはいないものも知性によって確かに現前しているのを、知性の目で見よ」、「現前してはいないものをあたかも現前しているかのように知性によってしつかりと見よ」などの訳が可能である。」

による反対のものの知覚と解するものである。バルメニデス、エンペドクレス、そしてプラトン、感覚知覚は似たものによる似たものの知覚であると言い、アナクサゴラスとヘラクレイトスに従う人々は反対のものによる反対のもののものであると主張する…… (3) バルメニデスははっきりとした定義をまったく与えておらず、ただ、二つの基本要素があり、知覚はそれらのうちの一方の超過に左右されると述べていただけである。思考は、熱が優勢となるか冷が優勢となるかに応じて変化するが、熱による思考はよりすぐれていてより純粹である。とは言うものの、それさえも一定の均衡を必要とするのだが、その理由を彼はこう言っている。

さまざま動く四肢の混合がどんなときでも現前しているように、

そのように思惟も人間たちに現前している、というの、

思考するその当のものは、各々すべての人間において同一のもの、す

なわち彼らの四肢の本質

だからである。なぜなら、より優勢なものが思考となるのだから<sup>18)</sup>。(断片 16)

というの、彼は感覚することと思考することを同じものと見なしているからである。したがって、記憶と忘却もまた、これらの原因から混合によって生じる。しかし彼は、それらが等しく混じり合った場合に思考が生じるのかどうかについて、またもしそうならその思考の特徴はどのようなものになるのかについて、まったく明確にしていなかった。しかし、死体は、火の欠如ゆえに光や熱や音を知覚しないが、それらの反対物つまり冷、無音などは確かに知覚すると彼が語るとき、彼は自分が、感覚することは反対物それだけによるものだとも見なし、程々を明らかにしている。そして彼は、存在するすべてのものが概して一定程度の知覚を有しているとも付け加えている。

18) あるいは「なぜなら、十分なものが思考となるから」。この断片全体の翻訳と解釈については議論が交わされている。これをめぐる議論と専門的な文献案内についてはたとえば Guthrie, *HGP II*, 67-69 を見よ。

である。女神はできる限り現象を救おうとしているが、しかし、彼女はその企てが不可能であることを知っているし、そうわれわれに告げている。ことによるとパルメニデスは、「真理に似た多くの偽りを述べるし、望むときには本質のことを語る」(ヘシオドス『神統記』27-28)というもくろみによってもたらされる、自在に立場を変えられる機会に、単に抗うことができなかつただけなのかもしれない。

## 第9章 エレアのゼノン

### I. 年代と生涯

ゼノンの年代に関してもっとも確実な証言は、パルメニデスの年代決定で用いられたのと同じプラトンの『パルメニデス』の二節(資料286)である。その証言に基づくなら、ゼノンは前490-485年頃に生まれたと思われる。またもやこの年代は、アポロドロスがゼノンの盛年として挙げた年代、つまり前464-461年(ディオゲネス・ラエルティオス『哲学者列伝』IX.29 = DK29A1、残念ながら原文は欠落箇所が多い)と相容れない。しかし、アポロドロスによるエレア派の年代決定がエレアの都市創設年にもみ依拠するものであることはすでに見たとおりである。それでも、もしゼノンが(資料314が伝えるように)本当に若い頃にその書物を書いたのだとすれば、その著作年代についてアポロドロスは偶然にもほんの5年ほど後の年をわれわれに示していることになるであろう。

ゼノンの生涯に関してはほとんど何も知られていない。ディオゲネス・ラエルティオスが伝えるところでは(『哲学者列伝』IX.28, DK29A1、これは資料286での話を肯定することにその意図があるかに見える箇所である)、彼は、エレアという「ちっぽけではあるが、人々を立派な人間に育て上げることにだけは熟達している国を、アテナイの驕傲さよりも」愛したのであり、全生涯を祖国で過ごし、アテナイを訪れることはなかった。彼の名前が単独で繰り返し現れる場面——僭主に対する謀反事件で彼が果たした役割と拷問にかけられたときの彼の勇気につづかわる物語(DK29A1.2.6.7, 8.9を見よ)——が唯一あるが、それぞれの報告は細部において一致しない点が多量に多いため、事実関係の全体像を復元するのは不可能である。

とよって当の命題をはつきりと攻撃するものだった、と推測するのは当然のことである。しかしこの推測に対しては、ゼノンの議論に関するいくつかの報告から疑義が呈されている。つまり、それらの報告——とりわけ運動をめぐる有名なパラドクス(逆説)についてのアリストテレスの報告(後出資料317-326)——では、ゼノンの議論はアンチノミー(二律背反)の形をもつものだったとも、多なるものが存在するといふ仮定をはつきりと標的にしていたものだとも説明されてはいないのである。この難問は、おそらく次の三つの考え方のうちの一つで対処されるだろう。(a) 資料314で言及されている著書の形式は上述のとおりであった。しかしゼノンは少なくとももう一編の書物を著していたのであり、その中に、運動のパラドクス、キピの穀粒のパラドクス(アリストテレス『自然学』250a19以下, DK29A29)、場所のパラドクス(アリストテレス『自然学』210b22以下, 209a23以下, DK29A24)、そしておそらくはその他のパラドクスも含まれていた。(b) ゼノンはただ一編の書物しか著わさなかったが、その形式についてのわれわれの想定は誤っているにちがいない。多分それは、多数性ではなく運動をその明確な標的とする議論を含んでいた。そしておそらくその議論のすべてがアンチノミーだったわけではなく、別の形の背理法も用いられていたであろう。プラトンは、彼の書物の形式がどういうものかを誤って伝えているか、さもなければ、その書物における議論を描写しているのではなく、必ずしも明確ではないがそれらの議論の根底にある標的についての解釈(おそらくは誤った解釈)を与えているかのいずれかである。(c) ゼノンの論文は一編だけしかなくて、ここでの議論のすべてが多数性に関する明確なアンチノミーの形をとっていた。(a)で挙げられた他のパラドクスも、もともとはその形をとっていた。たとえば、アキレウスのパラドクス(資料322)は、もし多なるものが存在するならば、各々は他のものよりも速くあるとともに遅くなくはない、ということの証明を意図したものであっただろう(アリストテレスの報告におけることはつかいに留意せよ。それは、アキレウスと亀という奇抜な比喩が、アリストテレスの参照している議論の説述には含まれていないかもしれない可能性を示唆している)。

ゼノンが、その一編あるいは数編の書物で諸議論を整えるにあたってどのような構成の原則に従っていたのかという点については、現代でも、それらの展開における組織的構造あるいは少なくとも総合的な戦略を突き止めようとすると試みが様々になされ

## II. ゼノンの書物

### 314 プラトン『パルメニデス』127D-128A

ソクラテスはこれ「すなわちゼノンによる自著の助説」を聞き終えたと、第一の議論の最初の仮定をもう一度読んでくださいと彼に頼んだ。それが読まれると、ソクラテスは言った、「ゼノン、あなたのおっしゃっていることをどう理解すればいいのでしょうか、もしあるものが多であるならば、その場合、それらは似ているとともに似ていないものでなくてはならぬが、それは不可能であるとあなたには言われる。なぜなら、似ていないものは似ているはずはなく、また似ているものは似ていないはずがないから、あなたがおっしゃっているのはそういうことではないのですか?」——「いかにも」とゼノンは答えた。——「ではもしも似ていないものが似ており、似ているものが似ていない、ということが不可能であるとすれば、多なるものがあることも不可能となるのではないですか? なぜなら、もし多なるものがあるとすれば、それらはさまざまに困難を被ることになるだろうからです。あなたの議論の目的はここにあるのですか——つまり、ふつうに言われていることのすべてに抗して、多なるものは存在しないと主張するまことにこのことに?」そしてあなたの議論のそれぞれがまさしくこの結論の証拠となり、その結果、多なるものは存在しないという証明を、あなたが書き上げた議論と同じ数だけ与えることになると実際に思っておられるのでしょうか? これがあるたのおっしゃっていることでしょうか、それとも私はあなたのことを正しく理解してはいないのでしょうか?」——「いや」とゼノンは言った、「君は私の論文全体の意図を見事に理解してくれた」。

プラトンが言及している論文はしばしばゼノンの唯一の著述作品と解されている。『スーダ』に保存されている著作名の一覧(DK29A2)には何の信憑性もない。彼の著作が、驚くほどの獨創性を備えた、人を当惑させる哲学の書であったことについては、資料念を抱く者はいないが、その形式と構想をめぐる諸説が入り乱れている。資料314(同じく315-316も見よ)に基づいて、その書物が一群の議論だけからなっており、その各々は、多なるものが存在するという命題からそれと矛盾する帰結を導出するこ

があるからである。かくしてあるものは無限である」。

資料315は、無傷のままわれわれのもとに伝えられてきた。唯一その真正性に疑問の余地のない著作断片である。それが提示する謎はたいして不可解なものではないと思われることが間々ある。しかしこの議論の各節は、少なからずわれわれを動揺させる力をもっている。たとえば、後半の節はおそらく、ある集合の任意の二つの元が、あくまでも一つではなく二つの事物であろうとするとすれば、それらは何かによって分離されていないのではない、という考えに基づくものであろう。これに対しては、そこで主張されている原則が有効なのは、点の集合のように密に配列された集まりに適用される場合だけだ、とする反論がなされるかもしれない。だが、もし立体的な諸対象が分離していることの要件が別にあることをわれわれがゼノンに納得させ、その要件が、点と点とが分離していることの要件となぜしてどのように違ふのかということとを彼に示すことができな限り、当然ながら、この反論によってゼノンが動じることはないだろう。そして、ある対象がなぜ一であって多でないのかということの理由に関する哲学的考察にわれわれが携わったときにはじめて、われわれはこれらの問題に対して適切な解答を案出することができよう。資料315は、まさにそのような種類の考察がわれわれの中に芽生えるようにわれわれを挑発することを目的としている。

316 断片2および1：シンブリキオス『アリストテレス「自然学」注解』139,9および140,34

(a) この議論「すなわち多なるものは大であるとともに小であるということ」を証明するもの」において、彼は、大きさも厚みも嵩ももないものは存在すらしていないだろうということとを証明している。「なぜなら」と彼は言う、「もしそれが何か他のあるものに付け加わるとしても、そのものをより大きくすることはないだろうからである、というのも、もしこれがいかなる大きさもたたないで付け加わるとしたら、それ「すなわちこれを付け加えられたもの」は大きさを増すことはありえないだろうから、そしてそれゆえ、付け加わったものは実際のところあらぬものであろう。それが取り去られてももう一方のものはより小さくはならず、さらにまた、それが付け加えられてももう一方のものが増大することはないなら、明

ているにもかかわらず、われわれには判然としなない。一つのよく知られた解釈案（これはカーク/レイヴンで採用された）によると、アリストテレスによって論じられている四つの運動をめぐるパラドクスは、二つのペアをなしており、一方のペア（競走路のパラドクスとアレキサウスのパラドクス）は、空間と時間が無限に分割可能であると仮定し、もう一方のペア（矢のパラドクスと動いている列のパラドクス）は、空間と時間が分割不可能な最小単位からなる仮定するものであった、とされる。そして、それぞれのペアにおいて、片方の議論は、物体の運動をまさにそれ自体において考えた場合のその運動概念にさまざまな不合理的を生起させ、もう片方の議論は、物体の運動を別な物体の運動と相関的に考えた場合のその運動概念に不合理的を生起させたのである。この解釈案とは別に、資料318-326だけでなく315-316も併せて考えた、より綿密で意欲的な企てがほぼ同時期にオーエン(G. E. L. Owen)によって発表された(*Studies in Presocratic Philosophy* II, 143-165)。そうした企てが人を惹きつけるものであることに疑問の余地はないが、そのどれひとつとして古代に典拠をもってはおらず、批判的な精査にそれほど十分に耐えるものでもなかった。とくに、運動をめぐる諸々のパラドクスの中には、空間と時間が無限に分割可能わけではないと仮定しているものがある、とする提言は激しい抵抗に遭った(たとえば、D. J. Furley, *Two Studies in the Greek Atomists* (Princeton, 1967), 71-75を見よ)。

### III. 残存しているアンチノミー

315 断片3：シンブリキオス『アリストテレス「自然学」注解』140,28

もし多なるものがあるなら、同じものが有限であるとともに無限である、というところをもう一度証明するとき、まさしくゼノン自身のことばは次のようになっている。

「もし多なるものがあるなら、それらは現にあるであろうとそれだけの数だけあり、それより多くもなければ少なくもない。しかしもしそれらが現にあるちよどそれだけの数だけあるなら、それらは有限である」。

「もし多なるものがあるなら、あるものは無限である。なぜなら、現にあるものの間には常に他のものがあり、そしてさらにそれら他のもの間にも別のもの

らはいかなる大きさをもたないほどに小さい、という証明を試みた。その証明については何も残っていない。われわれに残されているのはただ、ゼノンが、多なるもの各要素がそれ自身と同じであり—であらねばならない—そしてそれゆえ（とわれわれは推測してよからう）それは大きさに必要とされる諸部分をもちえない（資料338におけるメリッソスの議論を参照）——という前提からその帰結を推論したとするとシンブリオオスの言質（資料316 (a) 末尾）のみである。そして、われわれのもとに残存している議論の前半部分がその後に続いていたのである（資料316 (a)）。それはアンチノミーの前半節の結論が受け入れがたいものであることを強調するとともに、後半節のお膳立てをしていた。その節とはすなわち、何かがいかなる大きさをもたないからその場合それはまったく存在しない、というものである——これは多なるものが存在するというものとの想定と矛盾する。

資料316 (b) はアンチノミーのこの後半節を保存しており、これは、もし多なるものが存在するならば、それらは各々が大きさをもっていないとはならない、という仮定から出発している。後統の週及議論のギリシア語は曖昧で、どうしてゼノンが、何か大きさをもつものが無限の大きさをもっていないとはならないという帰結を推論できると考えたのかははっきりしない。おそらくは、その議論でもって、(1) どんな大きさも無限数の部分をもっていると考えてかまわないう、と彼は信じただのであろう。そこから彼は、(2) 明確な大きさをもつ無限数の諸部分の総計はそれ自体無限である、と推論した。そしてそれゆえ、(3) 多なるものどの要素もその大きさは無限である、と結論した。この結論は、アンチノミーの前半節の結論がそうだったように、不合理であり、したがって、これは単にアンチノミーであるだけでなくデイレンマ（両刃論法）である。

バーンズ (J. Barnes) は言っている。「明らかにこの議論は不合理である。そしてそれを真剣になつて擁護する者は一人もいない（つまり「現在では」ということ）。それにもかかわらず、これに反対する者たちは算を乱しており、この議論がふくむ瑕疵——あるいは主たる瑕疵——がいったいどこに見出されるのかというまさにその点について見解の一致は見られていない」(The Presocratic Philosophers I. 244)。資料315と同様に、というより当該資料の場合のほうがよきわだつたっているが、なるほど確かに、真相究明のためには、無限が存む哲学的諸問題に対して深くかつ炯眼をもつて関

らかに、付け加わったものはあらぬものだったものであり、さらには取り去られたものもあらぬものだったのである。そしてゼノンがこう述べているのは、一なるものを破壊するつもりだからではなく、多であり無限である<sup>1)</sup>ものそれぞれが大きさをもっているがゆえにである。というのも、無限分割のゆえに、取り去られるものの前に常に何かが存在しているからである。そしてこれを彼が証明するのは、多なるもの各々がそれぞれと同じであり—であることからして、いかなる大きさをもっていない、ということをもまず最初に証明した後のことである。(b) 大きさが無限であることを彼は同じ論法で先に〔つまり資料315よりも前に〕証明していた。なぜなら、もしあるものがいかなる大きさをもっていないならば、それは存在しないだろうということをもまず最初に証明した〔先の (a) を見よ〕後で、さらに続けて彼はこう言っているからである。「しかし、もし（多なるもの）があるならば、そのそれぞれが一定の大きさと厚みをもち、そのもの一部分が別の部分と離れていることが必然である。そして同じ議論は先端に立っている部分についても当てはまる。なぜなら、それもまた大きさをもち、その一部分が先端に立っているだろうからである。実際、このことを一度言うのも常に言い続けるのも同じことである。というのも、そのものの先端に立っているいかなる部分もなくなることなく、ある部分が別な部分とつながっていないということもないだろうからである。——かくして、もし多なるものが存在するならば、それらは小さいとともに大きくもあることが必然である。つまり、大きさをもちないほどに小さいとともに、無限であるほどに大きくあることが」。

ゼノンの複雑なアンチノミーは、その一部だけがシンブリオオスによって引用されているが、その目的は、彼がアリストテレスの『自然学』に対する注解の中でまたま論じていた問題の立証にある。にもかかわらず彼は、そのアンチノミーの構造に關して十分に語ってくれているので、われわれはある程度の自信をもってそれを再構成することができる。

ゼノンは、そのアンチノミーの前半節で、もし多なるものが存在するならば、それ

1) 写本のこの読みとは異なり Fränkel は「多なるものそれぞれが無限の大きさをもっている」と読む。

## IV. 運動をめぐるパラドクス

317 アリストテレス『自然学』第6巻第9章 239b9 (DK29A25)

運動に関するゼノンの議論は、それが提示する問題を解決しようと試みる者に非常な困難をもたらすものであるが、その数は四つである。(もとの英訳はGayeによる)

明らかにこの独特のパラドクス群は、今もおそれらが享受している悪評をすでにアリストテレスの時代に得ていたのであり、独特な一連の難問と認められるようになっていった。もともと、われわれには、ゼノン自身それらがそのようなものとして読まれることを意図していたのかどうか知る由もないのだが、われわれの説明が試みるのはただ、それぞれの難問の構造とその顕著な特徴を明らかにすることだけである。それ以上の哲学的研究については、読者は「主要文献一覧」を参照のこと。

## (i) 競走路

318 アリストテレス『自然学』第6巻第9章 239b11 (DK29A25, 資料 317の続き)

……最初の議論は、場所移動しているものはそれがゴールに到達する以前に中間点に到達しなくてはならないということ根拠に、運動の非存在を主張するものである……。(もとの英訳はGayeによる)

319 アリストテレス『トピカ』第8巻第8章 160b7 (DK29A25)

なぜなら、受容されている見解に反する議論が多くあるからである。たとえば、運動は不可能であり、あなたは競走路を走り抜けることはできない、とするゼノンの議論のように。

320 アリストテレス『自然学』第6巻第2章 233a21 (DK29A25)

したがってゼノンの議論は、何かが無限のものを有限の時間内に逐一通過したりあるいは接触することは不可能である、と主張する点で誤った前提を立てている。というのも、距離も時間も、そして総じて連続的なものはどんなものも、それが無限であると呼ばれる場合に、2通りの意味があるからである。つまり、それらがそう呼ばれるのは、分割可能性の観点から見ても、末端の観点から見てもか

与することが要求されるのである。したがって、簡単にゼノンの側に「誤謬」を帰せようと試みても、それはパラドクスに対して実り多い解答を提出することにはならぬであろうし、たいした説得力をもっていないであろう。しかし、これはおそらく注目に値することだろうが、(2)は無制限に真であるわけではなく、ちょうど1/2, 1/4, 1/8……というようにゼロへと集束する無限系列に関しては偽なのである。資料316(b)でゼノンが念頭に置いているのは多分そのような系列であろう。しかし彼の議論は、(2)が妥当するような系列を生成するように容易に定式化し直すこともできよう。たとえば等しい大きさをもつ諸部分に帰着する系列がそうである。われわれがよりいっそう批判的な目を向けるべきなのは(1)の方に対してであり、そしてそれが主張していること(今われわれがこれを、誤解を招きかねない正確さをもって表現すると次のようになる)、すなわち、もし大きさが無限に分割可能であれば、それは諸部分からなる集合——これは無限に多くの元を含む——をもっていないとはならない、という主張のほうに対してである。

資料316におけるゼノンの標的は、多なるものが存在するという命題である。しかしながら、彼の議論はパルメニデスの实在概念に対しても等しい効力をもつのではないのか。なぜなら、パルメニデスは实在を一であるとともに延び拡がったものと理解していたからである。この理解ゆえに彼は、アンチノミーの各節からの攻撃を免れられないように見えるのである。パルメニデスを救い出そうとして、これまで、ゼノンは無限分割可能性を拡がり(μέγεθος)のみからの帰結ではなく厚み(μάχος)ないしは高さ(ὄγκος)からの帰結であると考えたのだと主張されてきた。しかし彼の議論は、拡がりだけでも遡及を生み出すのに十分であると、明白にかつ正しく想定しているのである。エレア的・元論は实在に対して拡がりを認めていない、ということが言われてきた。しかしそれは明らかに誤りであるように思われる。実際、資料316が確かにパルメニデスの「真理」の部を突き崩すものであって、ゼノンもそのことを実によく認識していたのだ、とする結論には抗しがたい。おそらくゼノンは、常識とパルメニデスの形而上学とがまさしく同じ対話的論法(ディアレクティケー)の戦略によって立ち往生させられるという考えを享有していたのであろう。

分割を示す点に触れるのに十分なものである。

321 アリストテレス『自然学』第8巻第8章263a15-18, b3-9

しかし、この解決法は質問者に対する返答としては適切なものである（なぜなら、有限の時間内に無限のものを通過したり数え上げることが可能か否かが問題だったからである）けれども、事実と真実の説明としては不適當である。……だから、無限のもの——時間においてであれ距離においてであれ——を通過することが可能かどうかと誰かが問い尋ねたならば、それはある点では可能であり、ある点では可能ではないとわれわれは答えなくてはならない。なぜなら、もしそれら無限のものが現実態において存在しているならば、通過することは可能ではないが、もしそれらが可能的に存在しているならば通過できるからである。というのも、誰か連続的に運動している者が無限のものを通過したのは、付随的にであって、端的にはないからである。それとというのも、線にとつてそれが無限に多くある半分の線であることは付随的なことだが、その実体と本質は異なっているから。

ここでアリストテレスは再考している。資料320での解決法はゼノンに向けての適切な対人的回答を与える。しかし(2)は、もしそれが次のように定式化し直されるなら、そう簡単に棄却されるものではないのである。

(2) 無限に多くある点に触れるという仕事をやり終えるのは不可能である。

アリストテレスは、「無限に多くある点」が「無限に多くの、現実態において存在する点」を意味するならば、その場合にのみ(2)が真となるであろう、と見て取ることによって、定式化し直された議論に応酬する。どうやら彼はこの場合にそれが真となるだろうと信じているようである。なぜなら彼は、現実態において存在する無限の点のそれぞれに「触れる」とか「接触する」ことと見なされた無限数の非連続的な身身的行為を行なうことは不可能であろうと考えているからである(263a19-b3)。しかし実際には、「無限に多くある点」についての、より弱められた解釈が(1)によって必要とされているのだ、とアリストテレスは考えている。つまり、走者は、可能的に存在するにすぎない無限数の点によって分割される有限の距離（すなわち、われわ

のいづれかなのである。だから、ものは、有限の時間内に量的に無限なものとは接触することはできないのに対して、分割可能性の点で無限であるものとは接触することができるのである。なぜなら、この観点においては時間それ自体もまた無限だからである。そしてそれゆえ、無限のものを通過するのに要する時間は有限ではなく無限の時間であり、無限のものとの接触は有限数ではなく無限数の時間においてなされる、ということとをわれわれは見出すのである。(もとの英訳はGayeによる)

この難問（これは時に「二分割(ディコトミー)」として知られているものである）についてのアリストテレスの説明は簡略できわめて暗示的である。つまり、競走路において走者がなすべきことは走路の中間点よりも手前の中間点に（そしてそれから、それよりも手前の中間点に、そしてさらにそれよりも手前の中間点に、と続く）到達することなのか、それともむしろ中間点よりも後の中間点（そしてさらにそれよりも後の中間点に、と続く）に到達することなのかさえない不明確なのである\*<sup>訳注</sup>。しかしわれわれは以下の議論を取り出すことができる。つまり、

(1) 自分のゴールに到達するためには、走者は $1/2$ ,  $1/4$ ,  $1/8$ , ……という系列で並べられた無限に多くある点に触れなくてはならない。

(2) 有限の時間内に無限に多くある点に触れることは不可能である。

したがって、

(3) 走者はゴールにはたどり着けない。

アリストテレスの考えでは、われわれは(2)を排除することによって不合理な結論(3)に容易に抵抗することができる。つまり、有限な時間は無限に分割可能であり、そして無限に分割可能な時間は、走者が、無限に分割可能な距離を通過してそれらの

[訳注\* すなわち、出発点を基準に、全走路の距離の $1/2$ の地点、この $1/2$ のさらに半分だけ手前の地点(つまり $1/4$ の地点)、この $1/4$ のさらに半分だけ手前の地点(つまり $1/8$ の地点)というようにゴールとは反対方向の向きに中間点を取っていくのか、それとも、全走路の距離の $1/2$ の地点、その $1/2$ のさらに半分だけゴール側の地点(つまり $3/4$ の地点)、この $3/4$ のさらに半分だけゴール側の地点(つまり $7/8$ の地点)というようにゴールに向かう方向で中間点を取っていくのか、このどちらを考えているのかが不明確であるということ。]

## (iii) 矢

323 アリストテレス『自然学』第6巻第9章 239b30-33 および b5-9 (DK29A27)

(a) 第三の議論は、ちょうど今言及されたもので、つまり、場所移動している矢は静止している、という議論である。これは、時間が諸々の「今」から成ると仮定することから帰結する。なぜなら、もしこれが承認されないならば、この帰結は出てこないだろうからである。

(b) ゼノンは誤って論じている。というのも、彼の主張では、もしあらゆるものが等しいものと向かい合っているときに常に静止し<sup>\*註</sup>、場所移動しているものが常に今のうちにあるならば、場所移動している矢は動かさない、としているからである。しかしこれは虚偽である。なぜなら、時間、他のいかなる大きさと同様、分割可能な諸々の「今」から成るのではないからである。

## 324 断片4: デイオゲネス・ラエルティオス『哲学者列伝』第9巻72節

ゼノンは次のように述べて、運動を破棄している。「運動しているものは、そのものがその内にあるその当の場所においても、また、それがその内にあらぬところの場所においても運動していない」。

資料 323 (b) の報告は、原文からして不確実で、そしてまたもやわわめて縮約されている。そのため、この報告を見ても、おそらく矢の議論が、資料 324 でゼノンのものとされ後にデイオドロス・クロノスによって借用された(セクストス・エンペイリウス『学者たちへの論駁』X. 87) アンチノミーの前半節を構成していたものであろうということが明らかになるわけではない。以下は、アリストテレスが要約している推論の再構成である。

- (1) ちょうど自らと同じ大きさの場所を占めているものは静止している。
- (2) 現在、運動しているものは、それ自身とちょうど同じ大きさの場所を占めている。

[訳注] \* 諸国本ではこの後に「あるいは動いており (ἢ κινεῖται)」が続くが、Zeller が削除。この箇所に対する Ross の注を参照のこと。なお「あらゆるものが等しいものと向かい合っている」とは、あらゆるものがそれ自身と等しい空間を占めているということの意味する。」

れならこう言うところだが、1/2, 1/4, 1/8, ……という無限の系列に従って分割されるものとして単純に数学的に表現されうる距離) を通過しなくてはならない。そして、より弱められたこの読み方が (2) において採択されるなら、(2) は偽である。

アリストテレスの第二の解決法は、根本的な問題、すなわちパラドクスが提起し、依然として、激しくかつ決着のつかない論争のテーマとなっている諸問題を明らかに出すものである。ことに、無限数の非連続的な身体的行為を完遂するのが不可能であるという場合(実際それが本当に不可能であるとしての話だが)、この不可能性が、論理的なものなのかそれとも単に物理的なものにすぎないのかという問題に関して、そして、どちらにせよその不可能性がいったい何に存しているのかという問題に関しても、哲学者たちは見解の一致を見ることができずにいるのである。

## (iii) アキレウスと亀

## 322 アリストテレス『自然学』第6巻第9章 239b14 (DK29A26)

第二の議論は「アキレウス」と呼ばれているものであるが、それは要するにこういうものである。つまり、競走において、もつとも足の速い走者でも、もつとも足の速い走者に追いつくことはできず、それというの、追いかけるものは何よりも先に、追いかけるものが出発したその地点に到達しなければならず、その結果、足の速いほうは常に先んじていなければならないからである。この議論は二分割による議論と原則的に同じ議論である。ただし、附加される大きさが半分に分割されることのないという点で、この議論は二分割によるものとは異なっている。(もとの英訳は Gave による)

資料 318-319 の走者が次々に出てくる中間点に到達しなくてはならないのに対して、アキレウスは、亀が出発した地点にまず到達し、そしてそれから、亀の出発点に到達した時点で亀がすでに到達していた地点に到達しなくてはならず、そして同様のことが無限に続く。もし、追いかけるものと追いかけるものが一定の速度で走っていると仮定すると、その場合、アキレウスの一連の走りはまたもやゼロへと集束する等比較列をなすことになる。アリストテレスが評しているように (239b24-25)、アキレウスの議論は競走路の議論に演出を施したものにすぎない。

したがって、

(3) 現在、運動しているものは静止している。

と、

(4) 運動しているものは常に現在において運動する。

したがって、

(5) 運動しているものは常に——その運動の間じゅう——静止している。

アリストテレスは(3)と(4)から(5)へと進む推論に異議をとなえる。アリストテレスは、「今」ということばでゼノンが言わんとしているものは、アリストテレス自身がそれの意味しているもの、すなわち分割不可能な瞬間として考えられた現在である。そしてアリストテレスは、われわれがその推論を妥当だと判断してかまわないのは、われわれがゼノンとともに、時間間隔とはその内部の分割不可能な諸瞬間の総計であると誤って仮定する場合のみであると示唆している。彼のこの示唆は間違っており、それは、矢の議論において空間と時間とが無限に分割できるのではないとゼノンが仮定していると同しく誤った理解に起因する。ゼノンの議論は、空間と時間の構造に関するいかなる明確な仮定も必要とはしていない。ゼノンが自らの推論の妥当性にとって不可欠の条件としているのはただ、一定間隔の時間のあるあらゆる時点において(語時点が分割不可能な瞬間であるか否かにかかわらず)何かについてあてはまることは、その間中ずっとそのものについてあてはまるということだけである。

実際、運動が生起するのは——仮にも運動が生起するとしたら——必ず現在においてであるという魅力的な見解に対して、このパラドクスは辛辣な異議を提示する。それが示しているのは、この見解を、同じように魅力的な考え方、つまり現在においては運動するものはどれほどの距離も横断しつつあることは不可能であるという考え方と両立させるのは困難だということである。おそらくここでは「今」についての二つの相容れない理解が問題となっている。つまり、一つは現在の持続という理解であり、もう一つは分割不可能な瞬間という理解で、これはいわば過去と未来とを分かť線のようなものである。そうだとしても、そのためにゼノンの議論の印象がそれだけいっそう希薄になるわけではない。なぜなら、この区別をわれわれに強いるのは、ほ

かならぬそうした議論だからである。そして選択肢のいずれを選ぶかは、リア(J. D. Lear)が示しているように(*Phronesis* 26, 1981, 91-104)、時間の哲学の点で各自がもっている深く根ざした選好にかかっているのである。

#### (iv) 動いている列

325 アリストテレス『自然学』第6巻第9章 239b33 (DK29A28)

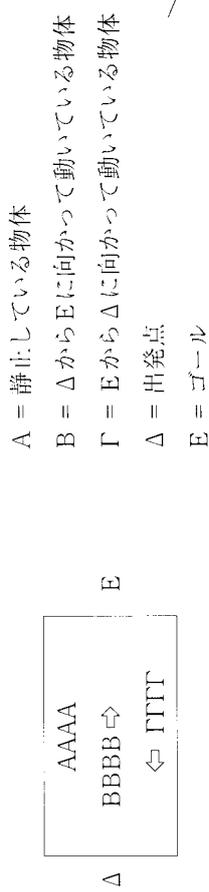
第四の議論は、次のような等しい大きさの諸物体に関するものであり、すなわちそれら等しい大きさの物体は、競走路において等しい速度で等しい大きさの物体に沿って、一方の列は競走路の末端から(われわれの方に向かって)、もう一方の列は(われわれから離れる方向で)中央から、それぞれ正反対の方向へ動く——この場合、半分の時間が(その)二倍に等しいという結論が出てくると彼は考えている。この虚偽は、等しい大きさの物体に沿って等しい速度でもが通り過ぎる場合、その物体が動いていても静止していても等しい時間がかかるとするところに存している。しかしこれは誤っている。たとえば、等しい大きさの静止している物体をA、A……とし、B、B……を、数と大きさがそれら(つまり諸々のA)と等しい、中央<sup>2)</sup>から出発する物体とし、Γ、Γ……を、数と大きさがそれら(つまり諸々のA)と等しく、速度がそれらBと等しい、端から出発する物体とすると、さて、先頭のBと先頭のΓは、それら(つまり諸々のBとΓ)が互いに沿って通過するとき、同時に末端にあるということになる。そして、そのΓ(つまり先頭のΓ)がそれらすべて<sup>3)</sup>(つまり諸々のB)を完全に通過し終えても、そのB(つまり先頭のB)は(それが通過するもの、つまり諸々のAの)半分しか通過していないということになる。したがって、その時間は半分である。なぜなら、各々の物体が各々の物体に沿って通過する時間は等しいからである。そして同時に、先頭の

2) 写本FJKでは「中央から」に「諸々のAの」が付加されているが、写本EHIJとRossはなし、シンプリキオス「アリストテレス『自然学』注解」1017, 4参照。

3) 「すべて」に続けて写本E<sup>2</sup>JK, シンプリキオス(『アリストテレス『自然学』注解』1018, 1), アレクサンドロス(シンプリキオス「アリストテレス『自然学』注解』1019, 28による)は「(すべて)のA」とあり、写本EHIは「(すべての)B」とある。Rossは削除。

B<sup>1</sup> はΓすべてを通過し終えているということになる。というのも、先頭のΓと先頭のBは同時に反対側の末端にいるだろうからである<sup>4)</sup>。なぜなら、どちらも諸々のAに沿って通過する時間は等しいからである。かくして、以上が彼の議論であり、それはわれわれがすでに述べた誤りに基づいている<sup>4)</sup>。

326 シンブリキオス『アリストテレス「自然学」注解』1016, 14によるアレクサンドロスの図解



資料326の図解はアリストテレスがゼノンの議論を例示するとき配置した三列の(おそらくは接触している)諸物体の出発点での配置を表わしている。われわれには語っていないが、どうやら彼は、諸々のAが競走路の中央にあり、その中間点から先頭のΓが先頭のBと同じく運動を開始すると仮定している。それからアリストテレスは、物体の大きさ、速度そして方向に関して資料325の最初の文章で設定されている初期の仮定が与えられた場合、それらの物体が実際に必ず到達するその後の位置に焦点を合わせる。それはすなわち、三つの列がすべて相互にびつたりと整列する位置である(「先頭のBと先頭のΓは、同時に(おそらく互いの列の)末端にある」)。彼は二つの単純な事実を指摘する。つまり、先頭のΓがすべてのBに沿って通過し終えたときに、先頭のBは(i) Aについてはその二つ分だけ通過したが、(ii) Γに

4) 「先頭のB」はComfordの読み、E写本は「AB」。そのほかは「諸々のB」と読んでいる。  
 5) この後に諸写本では「彼が言っているように、Bの各々の物体に沿って通過するのにも、Aのそれぞれに沿って通過するのにも経過する時間は同じだから」という一文があるが、Rossは削除。  
 6) 本文中の括弧が(そしてギリシア語テクストへのわれわれの注が)示しているとおり、資料325は困難で不確実な点に満ちている。上巻な議論については、たとえばH. D. P. Lee, *Zeno of Elea*. (Cambridge, 1936), 83-102, W. D. Ross, *Aristotle's Physics* (Oxford, 1936), 660-666を見よ。アリストテレスの不十分な解説が、もともとは、資料326のような図解の参照が理解の助けとなる口頭での発表で用いることを意図されていた一連の覚え書きであることは明らかである。

ついではそのすべてを通過したのである。アリストテレスによると、動いている各物体は、等しい時間にそれが通過するすべての物体とびつたりと相対していなくてはならない。とさらに仮定することにゼノンの誤りはあった。このことから彼は、(i) 先頭のBがAの列を半分通過するのに要する時間は、先頭のΓがすべてのBを通過するのに要する時間の半分だけであると結論した。しかし(i)と(ii)からは、(ii) それがAの列の半分を通過するのに要する時間もまた、それがΓすべてを通過するのに要する時間の半分であるということが帰結する。だから、先頭のBがAの列の半分を通過するのに要する時間は、それがΓの列を通過するのに要するのと同じ時間であるとともにその半分の時間でもある。

ゼノンは、彼の言う諸物体が、分割不可能な最小の物体であり、静止している一つの物体を各物体が通過するのに要する時間は分割不可能な最小の時間である、という前提を立てていたにちがいない、と——アリストテレスは言い落としてるが——これまでしばしば(カーク/レイザンにおいてそうだったように)想定されてきた。その場合、パラドクスは、その前提に対する強力な反論となる。なぜなら、各Bは各Γを分割不可能な時間の半分で通過しなくてはならないからである。しかしながらこの議論のアリストテレス自身による解釈の仕方は、彼が認める以上に申し分のない難問をもたらす。率直に言えば、彼がゼノンに帰している仮定は確かにありふれた過ちのように見える。しかしゼノンが、資料325で達した結論をわれわれに無理強いするには、もしある物体が大きさmの物体をn個通過する場合、それは編成単位m×n分の距離を運動する、というもつともらしい説をわれわれに認めさせさえすればよいのである。そうすると、単純な計算から、運動している編成単位m×nは、同じ速度で運動している編成単位2m×nの半分の時間を要するだろうということがわかる。またこの説は、相対論に同意して簡単に放棄されるような運動測定に関するものでもない。なぜなら、ある物体が運動する距離が、単に他の物体との関係におけるその位置の相関的要素にすぎないなら、はたしてそれに運動を帰するための絶対的な根拠などあるのだろうか。

「自ずと浮かんでくるのは矢の議論との対比である。われわれははつつう運動に関してよくよく考えようということがないが、いずれのパラドクスも、そのような無反省な思考に含まれるさまざまな難点をあらわにする。つまり、もし運動が実在し経験で捉え

ることのできるものであるなら、それは現在の瞬間において現出し、絶対的な測定を受けるものでなくてはならない、とわれわれはしばしば思うのである。それぞれの場合における明白な選択肢は、物体の運動を相対的な位置の問題にする、というものである。すなわち、分割不可能な瞬間においてその物体自身がより前より後に占める位置が問題なのか（おそらく矢の場合がそうであるように）、それとも、それが他の物体の位置との関係において占める位置が問題なのか（おそらく動く物体列の場合がそうであるように）ということである。しかしそうすると、どうやらそれぞれの場合に運動はもはや直接的経験で捉えられないように見え、そういうものである以上、いずれにしても運動は実在性——運動にはそれがあると思われるが——を欠いていることになるのである。

## V. ゼノンのねらい

327 プラトン『パルメニデス』128C (DK29A12)

……実際には、その書物は、もし「一」なるものが存在するならパルメニデスの議論には多くの不合理で矛盾した帰結が生じると示すことでそれを物笑いの種にしようとすする者たちに抗して書かれた、パルメニデスの議論のための一種の弁護である。この書物は多の存在を信じる人々に対する反駁なのである。それは、もし誰かが問題を徹底的に検討すれば、その人々が多なるものを仮定する場合の方が「一」なるものを仮定する場合よりもおおそくそう不合理な帰結が出てくる、と示そうとすることで、彼らにしばしば返す——しかもより多く——するものである。私は、そういう競争心から、若者だったときにそれを書いたのだ……。

『パルメニデス』がゼノンの著作の意味を論じるのにかなるのスペース (127D-128E) を割いているが、明らかにそれは、ゼノン自らがお自分の目的をはっきりと述べていなかったからである。資料327におけるプラトンの評定は、例外なくとはいかないまでも、たいしては受け容れられてきた。ゼノンの諸議論のうち、いくつか（たとえば運動にまつわるパラドクス）は、多なるものが存在するという特定の信念に向けられたものではなかったのかもしれない。しかしそれらはみな常識を攻撃するもの

である。そしてプラトンの説明の要点は、ゼノンが、憤慨した常識の側の反攻に抗してパルメニデスを弁護したことである<sup>7)</sup>。さらに、一元論はパルメニデスの中心的な主義主張ではなかったが、先に見たように (323 ページ以下) 確かに彼は何らかの形の一元論にコミットしている。ゼノンの諸議論の中には実際に、多元論の立場をとる常識に対してと同様に、パルメニデスの立場に対しても、根底からそれを掘り崩す議論があるのは事実である (345-348 ページ)<sup>8)</sup>。ここからわれわれが結論として導

7) カーク／レイザンは、ゼノンの主要な標的が、常識ではなく、特定の哲学的多元論者の一派派なわちピュタゴラス派だったとするかつかつての通説を支持した。しかし、この時代のピュタゴラス派が、万有の構成要素から構成される多なるものについての独特の見解（それらが調和（ハルモニアー）を示すとすする見解とは別に）をもっていたとか、ゼノンがそうした特別な立場を念頭においていたとす確たる証拠はない。

8) ゼノンが一元論をあからさまに攻撃したとすることはありそうにない。ただ、シンプリキオスの考へでは、エウデモスはそう想定している。次の資料を見よ。

330 エウデモス：シンプリキオス『アリストテレス「自然学」注解』97, 12 (DK29A16) による。ゼノンは、もし誰かが私に「なるものとは何であるか説明してくれるなら、私は存在しているものを説明することができよう、と常々言っていたであろうである。

331 シンプリキオス『アリストテレス「自然学」注解』99, 7 (DK29A21) この個所のゼノンの議論は、プラトンが『パルメニデス』の中で言及した彼の書物における議論と異なっているように思われる。なぜなら、あそこでは、彼はパルメニデスの一元論について正反対の観点から賛成の論を唱えて、多なるものが存在しないことを明らかにしているが、しかしここでは、エウデモスが言っているように、彼は「なるものを掃する（なぜなら、彼は点を一つ語っているからである）」とともに、多なるもの存在を認めているからである。ところが、エウデモスはここでもゼノンが多なるものを掃していると述べているのだ、とアレクサンドロスは考へている。アレクサンドロスは、「エウデモスが報告しているように、パルメニデスの友人であるゼノンは、存在しているものの中に「」なるものはないし、多なるものとは単一の集合であるがゆえに、多なるものが存在するのは不可能である、ということを示そうと試みた」と述べている。

多分後の方のアレクサンドロスによるエウデモス解釈が正しいだろう（シンプリキオス『アリストテレス「自然学」注解』97, 13 (DK29A21) を参照）。エウデモスは単にゼノンに次のような見解を帰しているにすぎないのである。すなわち、おそらく多なるものを構成しているにちがいないその当の単一については、どんな整合的な説明も与えられないだろう——なぜならもし諸々の単一が（点のように）分割不可能であるなら、それらはいかなる真正の存在をもたないが、もしそれらが（ごく普通の知覚可能なもののように）分割可能であるなら、それらは単一ではなく多

ではこのエレアのパラメデス\*<sup>註</sup>が、きわめて巧みな技を使って論じるので、それを聞く者たちには、同じものが似ているとともに似ておらず、一であるとともに多であり、静止しているとともに運動しているように思われるというのを、われわれは知っていないか？

## VI. ゼノンの影響

ゼノンの著書がメリッソスとアナクサゴラスの哲学的思索に先行し、これに影響を与えたのか、それとも事実はその逆であるのかという点については判然としない。それよりもはるかに決定的な影響が、レウキッポスとデモクリトスの原子論において明瞭に見取れるが、これについては後で論じる(512-514ページ)。ソフィストたちについて言えば、ゴルギアスの『風変わった著書『あらぬものについて』は、ゼノンの論法に色濃く染められ、ゼノン特有の思考過程を数多く反映している一方で、プロタゴラスは、あらゆる主題について矛盾する議論を組み立てることを唱道する点で、確かにゼノンから感化を受けていたにちがいない。ゼノンに対するプラトンの関心が開花したのは、彼の哲学生涯でも比較的遅くになってからだった。そしてその関心が生まれたい数々のアンチノミーであり、これらは、(とりわけ)運動、場所そして時間に関する含蓄のある議論——それは、アリストテレスがその『自然学』において自らこれらの論題を扱う段になったとき、大いなる刺激を受けることとなる議論である——でもってそのページを埋め尽くしている。明らかに、アリストテレスの運動の連続性をめぐる『自然学』での議論も、ヘレニズム初期の問答学派ディオドロス・クロノスの運動反駁(セクストス・エンペイリコス『学者たちへの論駁』X: 85以下)がそうであるように、より直接的な恩恵をゼノンから被っている。しかし、ラッセルが20世紀最初の10年間にゼノンのパラドクスの魅惑に負けてからというものは、現代ほどの熱心さで哲学者たちがそのパラドクスを論じるというものはなかった。すべてのソクラテス以前哲学

[註] \* パラメデスとは、知勇兼備で知られ、文字や養子、貨幣などさまざまな発明者とされているトロイア戦争の英雄であるが、ここでは彼になぞらえてゼノンをそう呼んでいる。]

き出すべきことは、ゼノンがパルメニデスの徒ではなかったということではなく、おそらく、その学説よりもむしろ方法を信奉したパルメニデスの徒だったということだろう。すなわち彼のパラドクスは、哲学的命題が不合理な結論へと現に至りつくか、または至りつくように思われても、そのことはこの命題に対するいかなる決定的な反論でもない——あるいはもしそうだとしたら、常識とはエレア派の論理と同じくらいにもろいものである——ということを示すものと解されるべきである。そして、もくろまれていた一般的教育は、完全にパルメニデスのような勧告であっただろう(上掲資料 294 参照)。「諸帰結のことだけを考えてはならない。それらを導出する議論にこそ汝の批判能力を傾注せよ」。この解釈は、次のアリストテレスによるゼノンの評定によって裏付けられるかもしれない。

328 デイオゲネス・ラエルティオス第8巻57節(DK29A10)

アリストテレスは『ソピステス』において、エンペドクレスが弁論術を、ゼノンが対話的論法(ディアレクティケー)をそれぞれ最初に発見した人物である、と述べている。

対話的論法ということではアリストテレスが念頭においているのは、プラトンの初期対話篇でソクラテスが追求した哲学的問いかけのようなものである。つまり、問い手は、対話相手からエンドクサ——すなわち、あらゆる人、たいていの人、あるいは専門家たちによって受け容れられている歴とした信念——に対する同意を引き出しておいて、それから、その信念を不合理なものへと還元するか、もしくはその信念が対話相手の信奉する他の信念と相反することを示し、これによって相手にその信念を放棄させるのである。もし問い手の動機や策に疑念が湧けば、その問い手を単なる論争好き(ἀντιλογικός)と言って非難したくもなるだろう。そしてプラトンが『パイドロス』においてゼノンを次のように描写したときに心に思い描いていたのはまさにそれである。

329 プラトン『パイドロス』261D(DK29A13)

なるものだからである(上掲資料 316(a) 参照)。

者の中で今日もとても生氣に溢れているのがゼノンなのである。

## 第10章 アクラガスのエンペドクレス

### I. 年代

332 デイオゲネス・ラエルテイオス『哲学者列伝』第8巻51節 (DK31A1)

ヒッポボトスによれば、エンペドクレスは、同名のエンペドクレスを父にもつメトンの子であり、アクラガスの人であった。……またエラトステネスも、『オリュンピア競技勝利者記録』において、第71回オリュンピア祭のりにメトンの父が勝利を収めたと言つて、アリストテレスの証言を引用している。文法家のアポドロスは『年代記』にこう記している。

彼はメトンの息子<sup>ち</sup>だった。そしてトゥウリオイには

まだその都市<sup>まち</sup>が創建されて間もない頃

やつてきたと、グラウコスと言っている。

そして、その少し後のところにはこうある。

またある人びとの報告によると、彼は祖国を逃れて

シュラクウサイに赴き、その人びととともに

アテナイ人たちと戦つたというのだが、私には彼らが完全に事実を誤認しているように思われる。というのは、そのころ彼はもはや生きてはいなかったか、あるいは完全に老境に達していたかであるが、彼がそのような老境にまで達したとは思えないからだ。

じじつアリストテレスは——さらにはヘラクレイデスも——彼が60歳で生涯を終えたと言っている。

333 デイオゲネス・ラエルテイオス『哲学者列伝』第8巻74節 (DK31A1)